

考及書考
九

79

585

11

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

流芳留梅の長き回徳文の記の二子探りしと名成まぬ
 仲交り不ぬ條らと能くさむ自がさく不ぬ唯
 人う送下ら葉さして不伝との也標カにむし

門 79
 兼 585
 意 11



可
 九
 二
 各
 之
 記

○ 書次第

- ううこの時ハ 十
- さふとれ時ハ 三
- ちたりたき勢ハ 二
- 人ふとれくも時ハ 二
- ちやうちくの時ハ 二
- よらうひの時ハ 二

くまののけい

くまののけい

丁 二

かよふとさか

工

一 庚乃とて様しる

一 春ハ一

一 夏ハ

二

一 秋ハ 井

一 冬ハ

井

一 高形班ハ 又黒

一 高形班ハ 又黒

一 高形班ハ 又黒

能治身之書

一 東大寺

一 三吉野

一 道途

一 西野

一 法皇

大正の東大寺 双程の書也 赤梅標と云

一 高形班ハ 鳥の羽とて 書部ハ

下

一 小ゆひのそめさうや

一 先言部は火と入原とくさくさしてせうぶら
かたうくして能ありとさゆー 書部
のさくくハ下と玉二つと筆さうりくさく
てありと能あり 書部ハ火よめくさ
なりとさゆー 也扱小指うて拭又言部
と筆さうりくさくさ 持字 書部ハ又合よ
とさゆー 廉おある原ハ等。二つとさゆー

付也扱志形と後ハ等うして中ふ元とわけ
てハ部とさゆー 良とさゆー 又さとあ
けさゆー 扱原と柄ー びら付
ハせんつとさゆー 乃 是とひとさゆー 指乃
さゆー のそハよさうさ 扱よめらさめく
らとよハたのさゆー せさゆー くとさゆー
らゆー

一 玉おのさゆー 書部ハ又めくさゆー 方をさゆー

はくし^イ方^イはくし^イ也

一 へよほし^イ時^イの^イ玉^イお^イと^イく^イし^イ指^イの^イさ^イだ^イの^イそ
はよ^イぐ^イて^イほ^イ也^イ又^イ下^イ玉^イほ^イも^イ能^イし^イ
結^イぬ^イし^イの^イ玉^イお^イの^イ又^イ玉^イお^イと^イ定^イじ^イり^イの^イ初^イ
人^イは^イ後^イ時^イと^イ多^イよ^イと^イあり^イ時^イの^イも^イ也^イ結^イぬ^イ
極^イは^イ何^イ時^イと^イよ^イり^イよ^イと^イる^イ也^イ

一 きん^イの^イひ^イさ^イの^イ角^イと^イ丸^イ同^イと^イい^イく^イ玉^イお^イ
し^イ向^イく^イと^イく^イあり^イ

一 ち^イわ^イら^イの^イ靴^イの^イ火^イは^イぶ^イき^イあ^イま^イい^イう^イも^イ細^イり
わ^イら^イま^イの^イ火^イぶ^イき^イあ^イま^イと^イち^イと^イり^イ
こ^イら^イ也^イ小^イ刀^イと^イて^イは^イく^イ也^イ

一 ち^イの^イき^イさ^イの^イた^イと^イり^イ紙^イよ^イ入^イく^イ者^イ玉^イ紙^イの^イ
す^イ方^イな^イし^イ

一 ち^イの^イあ^イの^イの^イ極^イあ^イり^イ火^イぶ^イら^イの^イ者^イ玉^イの^イそ^イと^イ
ち^イよ^イり^イ也^イ物^イ理^イな^イの^イ火^イぶ^イら^イの^イ者^イ玉^イ
は^イち^イい^イく^イは^イく^イ也^イ小^イ刀^イと^イて^イ

一火よりして書やうるものありしはさういふ
せうのけし

△
一各社の書部なるものありしはさういふ
うらむものありし書部よきはずつけりし
しあり也

△
一書部やうまたの指するは書部の名
る如くくさし指するはたよきうらむ
り指たり

○
一各社の書のちよきい解の書部はさういふ

○
一各社の書りさういふれは雨の朝雪の夕あに
必ずへしえの書のさしちり也

△
一書部の所とありし書と所のよきは
さういふんとありしはさういふの
し書入るはさういふ

△
一各社の書部は所とありしはさういふ
一書部はさういふはさういふはさういふ

△
○
二名書きのじ紙唐紙より一考はより色ち
くもい書はぶるあり

△
二考代紙の唐紙は指海一寸八分の丸唐紙
より二考ははらうより丸く結はらるるを
のり一袋のさうの唐紙をお懸仕の指
よりすう

△
一考代紙の丸の唐紙はさうの丸く結はらるるを
なりのりよりさうの唐紙をお懸仕の指
よりすう

考代紙の唐紙はさうの丸く結はらるるを
なりのりよりさうの唐紙をお懸仕の指
よりすう

△
二考代紙の唐紙はさうの丸く結はらるるを
なりのりよりさうの唐紙をお懸仕の指
よりすう

火来るるるは是は新らききいあふいあふい

二下りた言ハ初中後とも同やん

二八重菊とよまれとやうくもや

陸橋ちりし

二あつりのあり言ハ他種斗十粒のあふ

いまるくもてもくしを

二中川他種よろうと云す形物也

二書つめはく時かかんといふ

らうたどのおつてあつて言やん時ハ

灰と尖とまはまろく言梅時あろく

二高形雲ハやりの中くもろく上も也

あんどん

二まわつ糖粉よりてきくのまれ中の白こ

とまやま二粒とあふは合粉よりて玉る

郊よ入火とほくろ

二言郊の灰よ沈のひりのつるも葉と干て

焼く月う火久しくうこゆく

一 言炉の灰よ大豆のうこを焼く又のうこ

小新しく月しくよ

一 言炉の火よたうのまをうこりて

とまわしくて煮て洗焼の葉の炭のこ

しく焼粉うしくて用と云

一 言うりよ言炉言合玉付の言をけ

こやうしくこよ玉こ

一 言よ言炉言合玉言物ハまま

言炉言物言の月け如よ玉又二つ

よしく小玉しくしくもあう焼く

たの言よ言言言言の月く玉又

始言言物言のよおもくしく

い書他女不紅白二言の言はは一丸しく下に分は不用
たわ有 一 言言言言言言言言

雪月花集

五十種之内

神樂

立舞袖

舞

^{キヤラ}くさ

^{キヤラ}林下

^{キヤラ}上馬

落葉系

^{キヤラ}山陰

人

かえん

^{キヤラ}早梅

くさくさ

第

^{キヤラ}般若

うかぶ

あき

二系

白馬

おさふ

月

あけ

立田

^{キヤラ}代黒

あけ

^{キヤラ}斜月

^{キヤラ}似

あけ

^{キヤラ}重如性

^{キヤラ}西

あけ

たふ

^{キヤラ}杜

あけ

交菊

雪

^{キヤラ}あけ

所津

^{キヤラ}所

あけ

麒麟

孔雀

あけ

キヤラ

中川

火草イタダキ

中川口付

足垣

新花キヤラ

小糸

おろろ

うしろ書

十種之香ラコウタキ
スモタラ

太子キヤラ

三香クキカラ口付

中川キヤラ

道遠クキカラ口付 日

古木ラコウ

花橋キヤラ

八指

コラ上

追か六種

念珠キヤラ

赤梅ラコウ スモタラ

流外日
仏産キヤラ

コラ上

右津家之書

名香目録

九
十
行
文

日新花
落雲
新樹
宮壁
明石
清音
浮橋
中川

三竹
大井川
名茶本下
初草
手向
八重菊
冬野
花見里

夕時多
比く人
三芳野
初濃
探毒
召く
水波
くろく

きん皮
圓基
紅
美漢
枕
名
荷葉

男山
船乗花
舟の
落石
川浪
楫枕
菱舩
舟の

茶子言
大ぬき
古川
紅花
きん糸
清く
くし姫
くし姫

七夕	人	八重垣	きく	小倉	花葉	長く盤	御竹
いさ花	冬	寸葉	厚く言	竈中	松の戸	松葉	物
中出く	柳	寸代	見うさ	わあら	己をく	三日月	燈を文

摘	瑠屋	訪友	仙	山	かき	冬夜	まうさ
秋葉	ふよう	玉葉	とく	く	おやめ	夕霧	下波
立葉純	庭葉	立田	杜あ	又月夜	水葉	夜衣	荊莖

夕人言
芍药花
手枕
持寝
初房
白鸟
八
竹言

小言
出菜
名裁
之
手向
林言
溪言
志魚

山法
波女みりもも
十九
松風
泊漱
喜持
柴山
夕言

初言
花溪
名裁
朝言
里

山タムラ
七夕
文一
久
破山
丑
林風

初溪
山
胸
房
理
夕言

系極送卷所抄

河溪 吐月 風葉 落 漏月 塩詠 名越 雲杪

茅村 小宮 庭梯 白浪 烟風 老毒 宅梅 柳心

竹葉 桂嵐 早苗 晚花 和紫 露草 六月 雲霄

房之 事府 不之 夕梅 老京 凌波 林清 篠目

玉舞 赤雲 久之 老矢 老茶 雲江 枕 溪竹

溪河 岩松 春溪 曉露 林月 洞庭 竹弓 赤也

冬松
後芝
菱蕙
送月
丹楓
曾台
花林
五代

清心
毫頭
尾上
夕月
暗香
栲川
松宮
古心

菴花
花陰
森清
藝
唐菊
江柳
榴蕊
曙

霜夜
篔江
花松
煖景
深山
端午
笑景

雪中
踏花
早梅
春水
初喜
鷓首
溪楸
春景

春晴
房水
杜心
海棠
長安月
西秋
御船山
松煙

埋木 海月 村多 風色 文毒 一多 小田吉 美遊

清風 山風 花多 秋芝 芳松 曉月 花裡 存松

林雪 林系 木下 多拜日 雙箕河 美榮 斜月 水梅 冬之慈

編雪 松風 於燕 秋雪 朝明 林露 玉章 字浪

映雪 嶽山 紅毒 又更 送月 迦羅 夕之几 只之少

又之 秋蓮 仙風 卷之 現桃 新之 石帶 忘梅

松葉

わしゆ

三冬

片糸

梯

手

字ひりん

庭

紫去老待

林下

山梯

ひりん

ひりん

去本待

花言

空月

空下風

法花種

一文字

○道安持高枯木身くは不審

指体道安の語一云空せし香

此一帖三条前内府清本戸請

合書言事也

皮清本飛多升之勢也

志野

天正式

霜月日

宗信

大寺

法隆寺

東大寺

逍遙

三芳野

紅鹿

古木

中川

法苑珠

魚橋

八橋

園城寺

追加

以上十一條

似

西土烟

萬蒲

般若 大佛性

摩訶班

揚子紀

寺之梅

飛梅

種梅 追加

正壽寺

漢橋

月 禁裏橋

新田

石系架

斜月

白梅

寺名

法堂 追加

寺梅

八重垣

花裏

花書

明月

寶

榮子

卓 追加

橋

花書 追加

丹 追加

花野見

明月

寺

上蓋

十又和

○十炷香し記

ウ三三三一一二二二三一

梅花 一二二二二一一三三三ウニ一

緑竹 一二一一三三三ウウウ三

芙蓉 一二三一一ウウウニ二

芳葉 一二二二三三ウウウニ三

芭蕉 一一二一一三二ウウニウ

札十二枚より十柱香の包やう

下

其のしつ母に二のれとくく可支の射一よ
 ても二よりても二めてもかなんくおひん射
 ハ客のれとくく一かよあさうきあさう
 てふ射射ハ射たさあんまて一のれと二
 射跡一垂く射一支の善客は是と初
 客とくく一のれとくく二のれとくく三のれ
 とくく又客のれとくく射あさうおひん
 と二射跡とくく是客と十かあは客とくく

是て定あさう客は点うくく一客のハ点
 四つ二くくハ点二くくれくくは射ハ一二三客
 と客とくく
 △点のうけやうおなひとひさう成あさう
 とくく客は客
 △客中のれと一射つれ筒に入中本は客
 射一と一の射者さうつ一二と二の射者
 ふうらと終さう同様く十粒終うく一の

のちよき乃二字とさくしあつりきり
 あれは点成くくくしあつりきり
 系ありしてきよありくく成ハ空まき
 たりきり成の一魚ハ空まきと記し
 くのりもあつりし

○花月書し記

^{花名} 月一花二月三月二花三花一客
 梅を月一花二月三月二花三花一客

緑竹 花二月二花三月三月一花二客一星
 芙蓉 月二花二月一月三花三花一月一持

花方点八

^{月名} 月二月三花三花三月一客一持
 芭蕉 花三月一月三花一月二花一花二星
 青松 花一月二月一月三月二花三月四星

月方星九 月方星九

花月をよきりしりの射ハ多ク少と満

せん持しすまへ

花月香のり書六と二宛十二色一
六色よのむ一花二色三月二月三と
書色のりよと書付しけ六色と試みあり
跡六色ハ色紙のりよのむ一色二花三月
一月二月三と書付しけ六色と試みあり
さて試の書付あり時花一色二色ハ
花三色ハ月一色ハ月二色ハ月三と火本

より名ふしあり一色は書付二火本二
あり花月香のり書付あり三色あり
月香より書付あり六色のりよのむ
よのむ一色あり花月香のり書付あり
試の書付あり書付あり一色あり
のれとあり又月一と書付あり月一のれと
あり書付あり書付あり又書付あり書付あり
あり書付あり書付あり又書付あり書付あり

わついはは

名乗

都のふりて

志ううすむ

名乗

世にうらむ

名乗

人ひりうり

名乗

定路の書にうり書又さうとすふして又
色よはうは路と云又色よはうして中よ
うく又色の試とありし時書す

是の我唐是の都のふりて是のふりて
むき世にうらむと云ふ人ひりうり又
色よはうと云ふ書ありし時試す
又色の書にうらむ書ありし時一色つ
かしの時我唐のふりてはうりて都のふり
てありし時色よはうの紙の形よ
し付よは我名乗と云ふてかしの紙の
うりよは書しぬ紙をうりては

紙とびくき記録紙より一巻はか
の一包とびくきさきと記録紙のも
一ふと射あつらふるよと紙うけらふ
らとあれた又一類はくさつとさめり

○小巻書きの記

一二三四日
りららら
はららら
日

いーたさ
あははは
ふふふふ
くろつ
ひとえ
あさり
小巻書きの試み
うして一二三四日又一二三四日又と射あつら

あり色紙十枚書よ同——とて二つはけ
 玉河色ありとも一色とりくみ色とせ
 合せありし時たよく一二三四とありと
 ありひん時ありちとりとと名集と紙
 よち付ト一二三四とありと思ひん時あり
 ありとりと付く一二三四とありと
 ありひん時ありちとりとと名集と紙
 同——た中の紙紙さうひん——と記紙

よらう——とて書色とひん——とありよ
 点紙うけり

○郭公書記

- 一 一名集
- 二 二名集
- 三 三名集
- 四 四名集
- 五 五名集
- 六 六名集
- 七 七名集
- 八 八名集
- 九 九名集
- 十 十名集

- 一
- 二
- 三
- 四
- 五
- 六
- 七
- 八
- 九
- 十

又

名案

郭と書いめんくおのれりやみぬらんを
 一とされつこ包紙の上は我名と書けり
 かし火本上げぬ書のつけも同やう
 よそろく同一又ようちてつるんくおく
 よそれくのな案と書けりや納ん何
 ちぬめれ書我書とこひん付れ紙のらふ
 一とありとも二とありとも公決身よち付

よよう名案と書けりしこすれ紙とひ
 こ記添紙よ一これ二階と書のせもな
 りんくの包紙とひこ記添紙のけよ
 虫のせありりよ虫紙けあつるな
 早紙つこひん自然友人同書とわ
 りんここ付いも一やよあつるん記
 ぼよあつるん同ありもあつたこ二三回
 書の時れ紙よ二三回ありもあつるん

ませ合はもしありともおてき節もま
しし何類ともふやうくくしり二類つ
まそては二類うらうらうとやうにきやう
とありやもさうとやうとありともさく又
うら二類うらうては二類つとさうと
やうとやうとさうとさうとさうとさ
とも余皆同一紙何れも記録紙よ
うらうては包紙といひうらうとせん

さくしとありうらうとさくしとさくしと
若のる較の紙身は二類ありさうとさうと
かそくしとありさうとさくしとさくしと
とさくしとありさくしとさくしとさくしと
あまのきくしと三類ありさくしとさくしと
たまのたぐひと

○系書書き記



付包紙とひらきまゝに記録紙のまゝに
 のせとてかゝる心持のせんさくむら
 さいりくもよくりくもむらむら
 又紙とくもあつりくもむらむら
 又紙六紙九紙まゝに書ハきまゝに
 ろもよくりくもよくりくもよくり
 と累の下もれ紙もとまゝに
 ○十紙書焼合し記

一
 二
 三
 一
 二
 三

考松
 一
 三
 三
 一
 二

縁竹
 三
 一
 三
 三
 二

蘇花
 一
 三
 三
 二
 二

美谷 一三三ウ一二二三
 二
 梅子 一一二二三二
 一
 芳系 一一二二ウ三
 三
 緑竹 一二三一一二二
 六

○ 源重喜の吉盤 源氏

同
 同
 白小旗
 同

● 赤大旗
 同
 同
 ● 赤小旗
 平家
 同
 同
 白大旗
 同

源重喜の吉盤の千姫も同く但二姫は
 三三三のうらそいあひてあま札あつと
 といひし時はいくす下とあけて玉二姫つ

ひろくそてわらりたる時ハ旗と一万々々
 ともしりく定ハ二二の一実定るは白休りじ
 うひて双方わらりたる時ハ旗と玉うゆる之
 中流とつとく一方わらりたる時ハ中流
 よあく玉く一方わらりたる時ハあくこ
 ぶすく一万とくぞくしてそれあくを
 ひくく係成ハ白旗赤旗ハ赤旗とありあり
 大旗と中よとくくあくの小旗と我々のあ

よふこころ
 うら
 旗の紋ハ昔の札と同

○島合書記

うら

よふこころ

うら

うら

ありらり

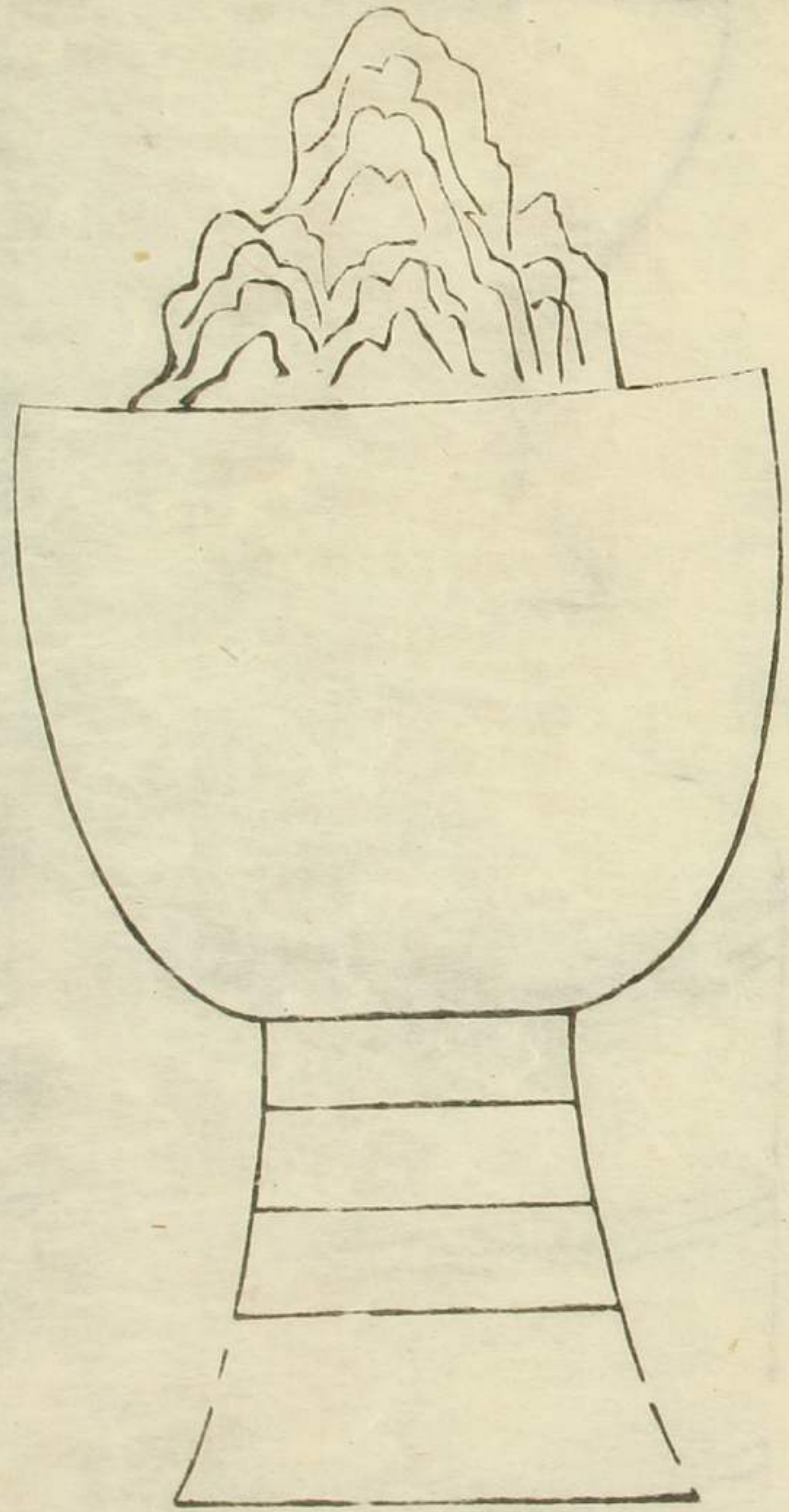
香物事本恒御為志中入有相傳
 之方及出以才記之以此之有矣念
 夫之有之以此方於御不常數能奉
 志之入以之方多以此方出之能
 中之如左

元龜治子

安之相乘

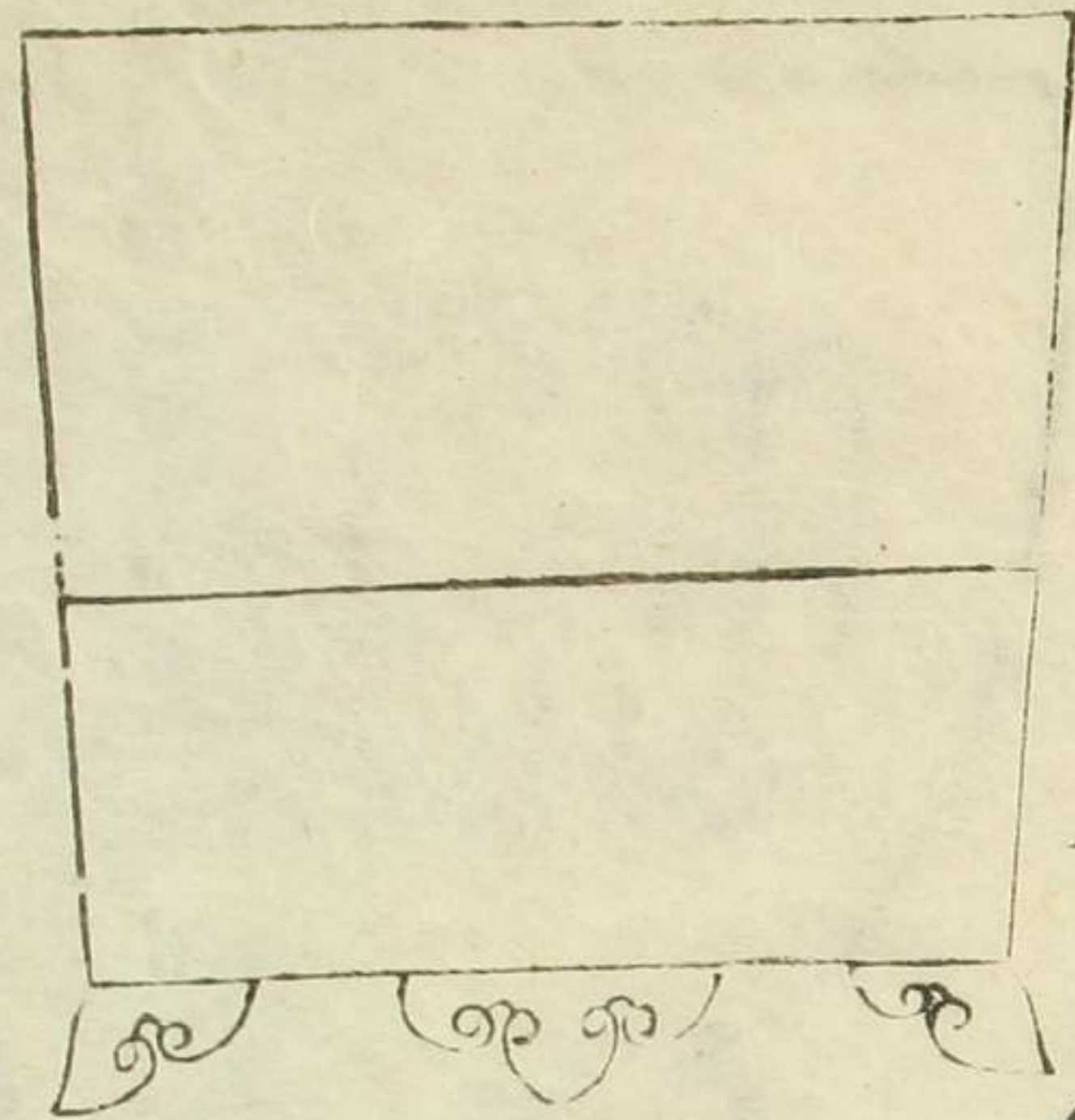
宗入

二重香炉 灰又合

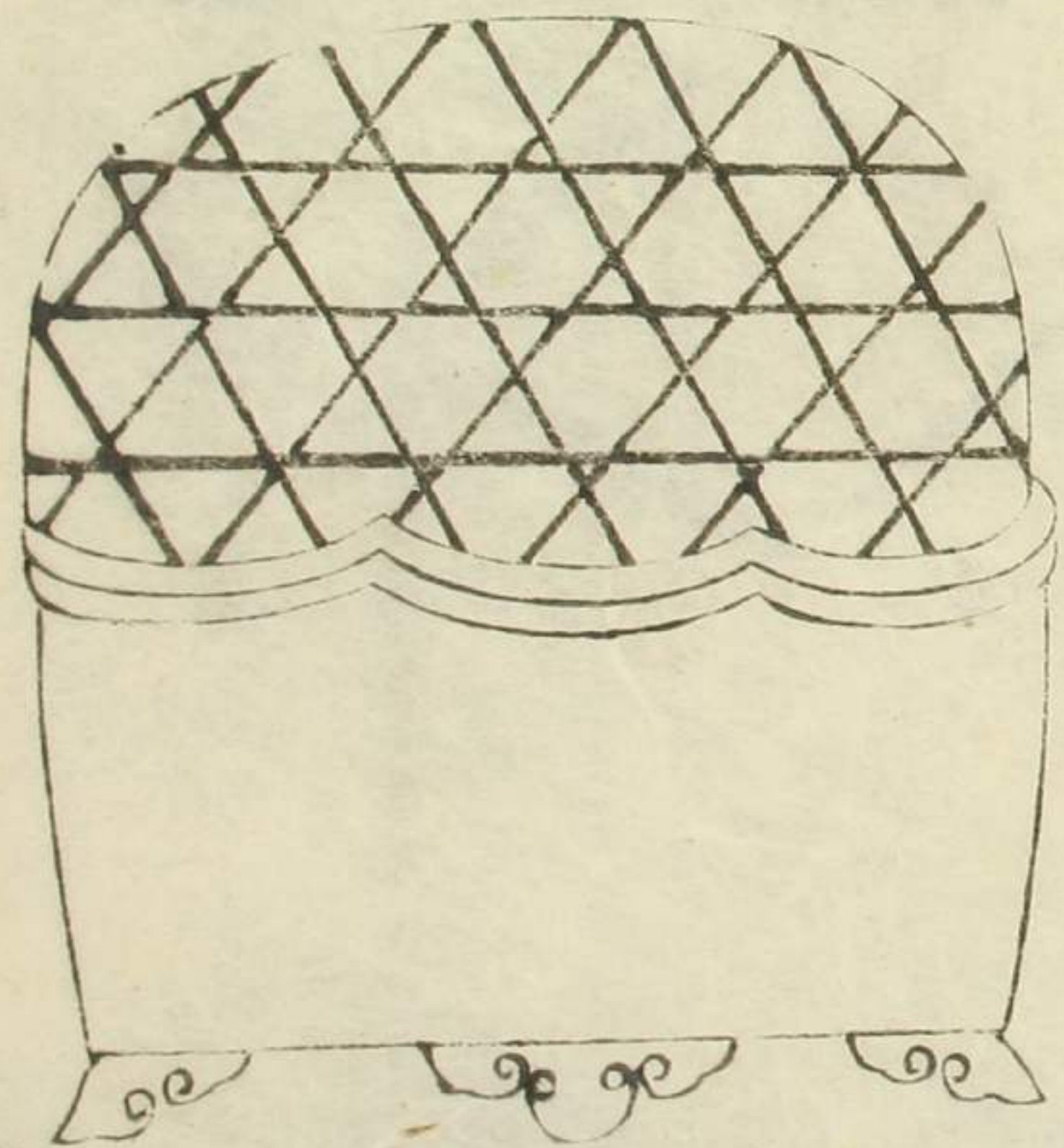


神奈川縣物之 沉之遺如以重

下

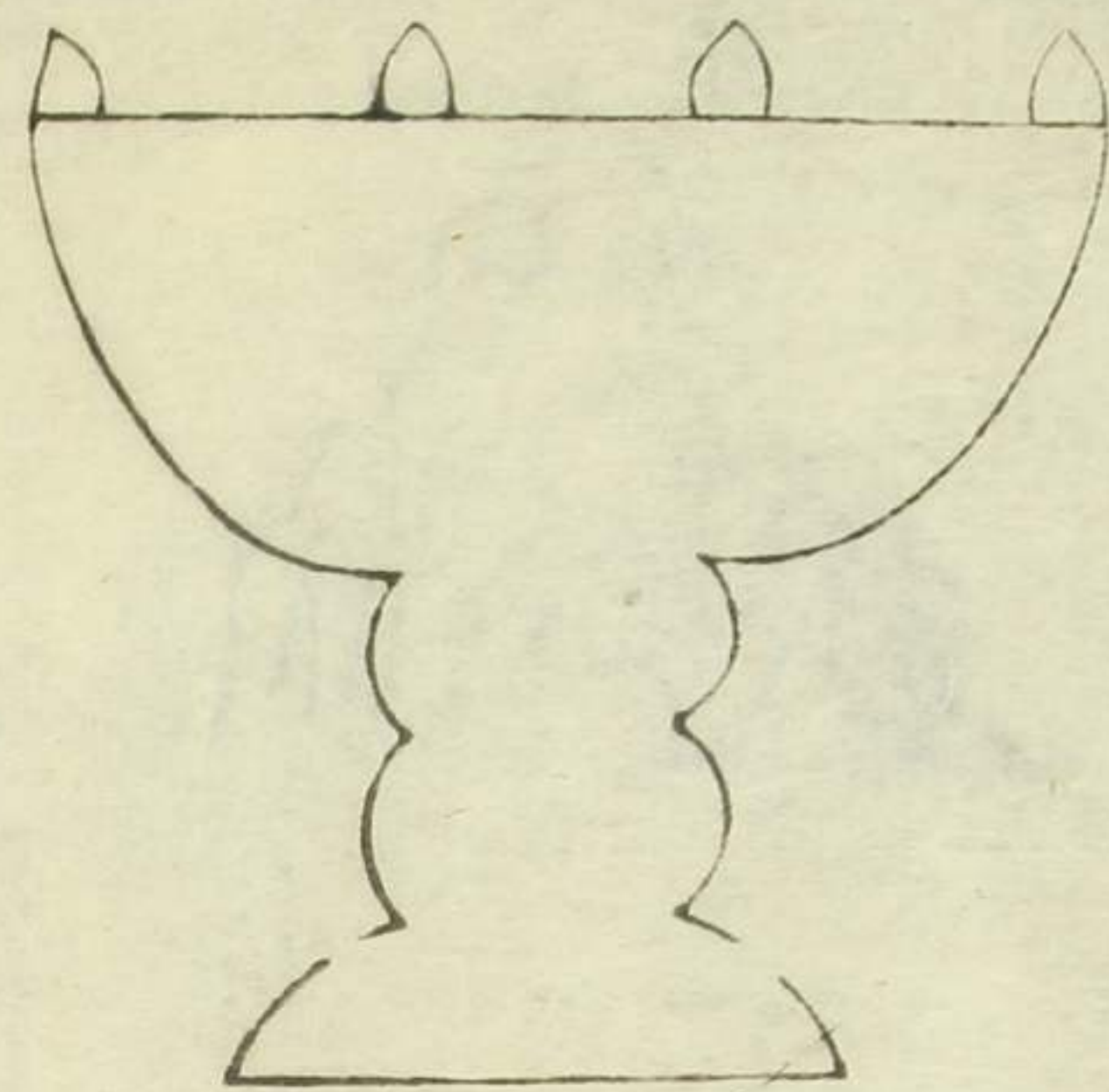


桶かじり香炉
灰又合

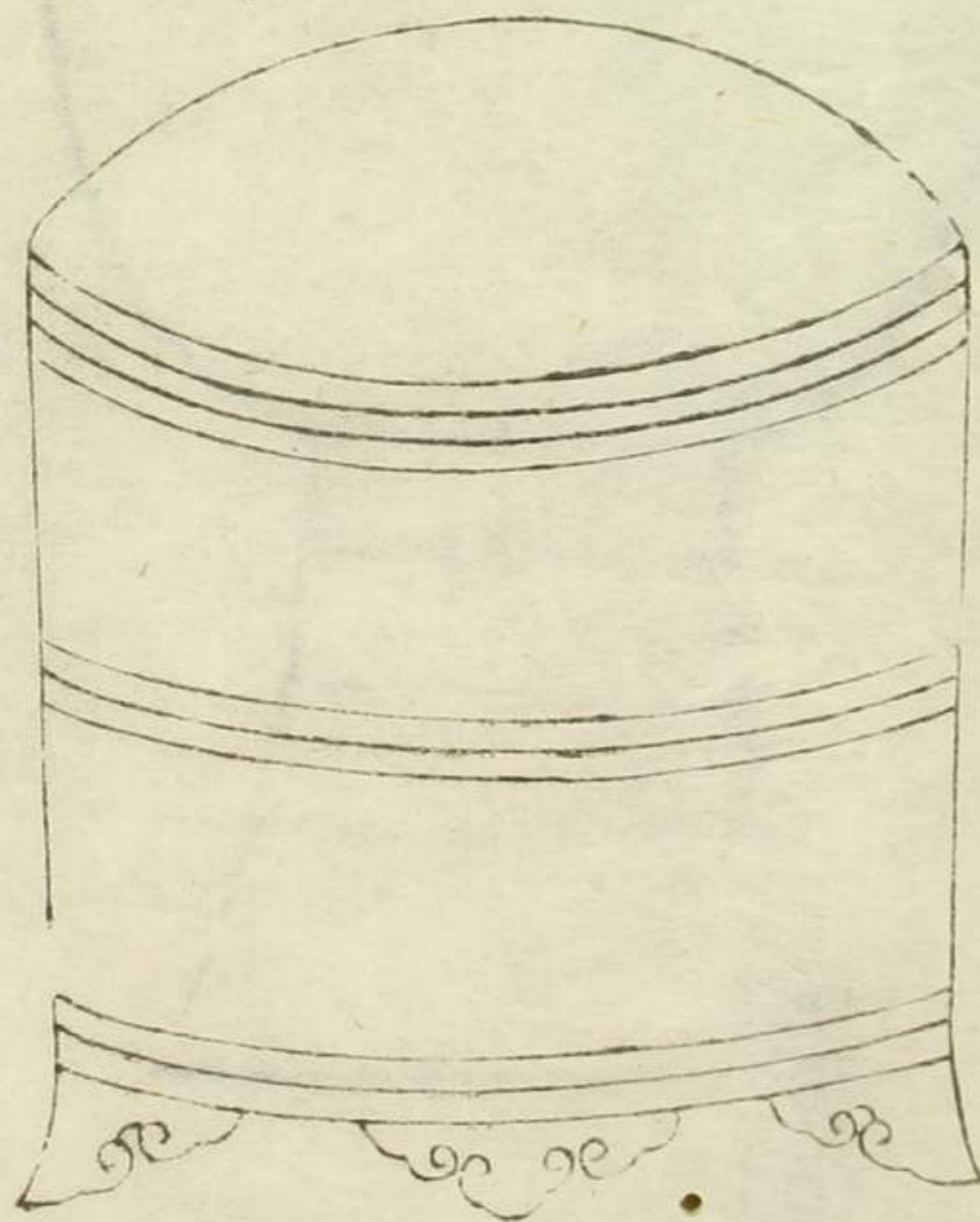


火とり香炉
灰又合

F

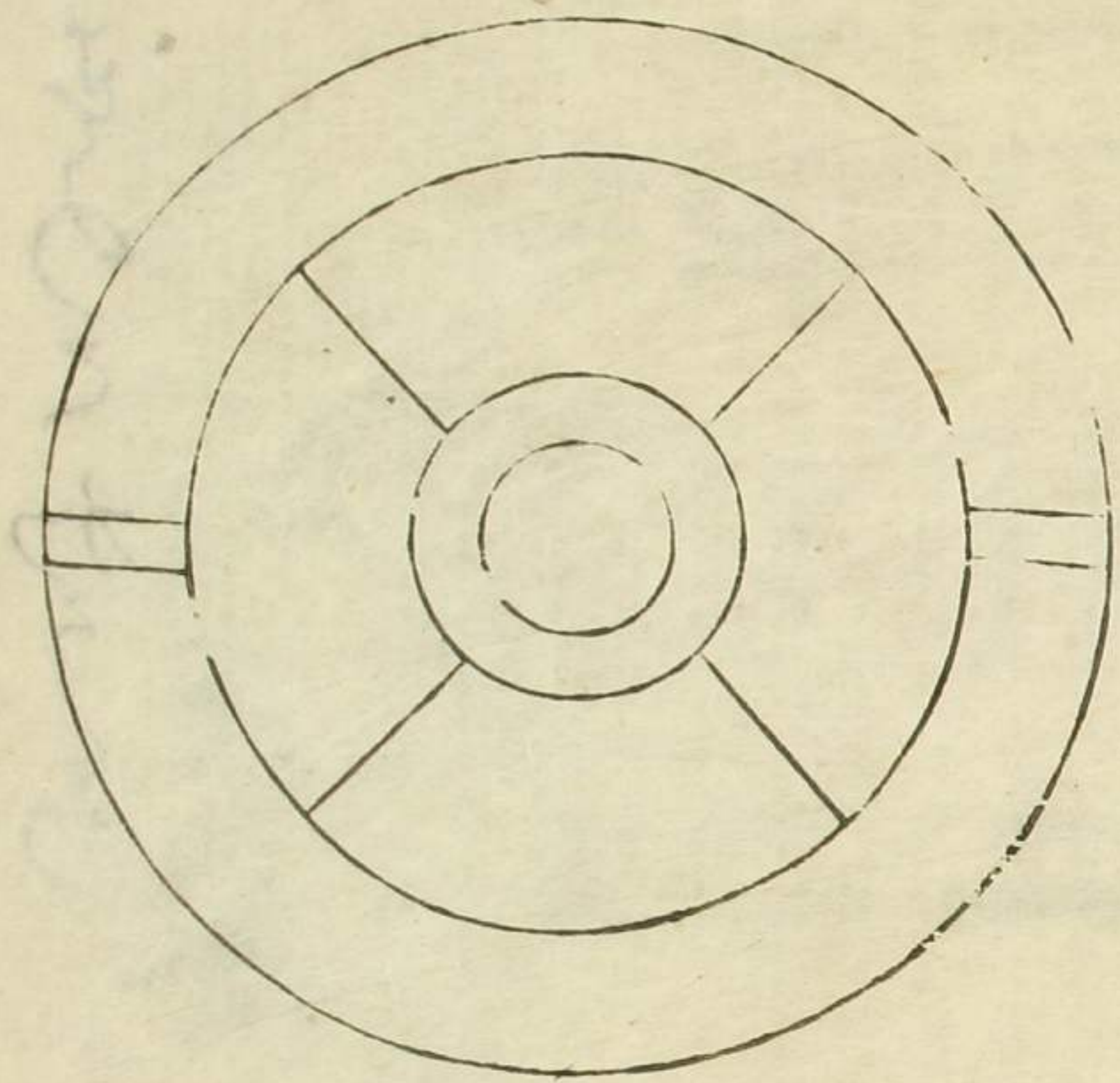


印如香炉 灰五合
日月夜香止る時香と燻相之



此香爐 灰又合

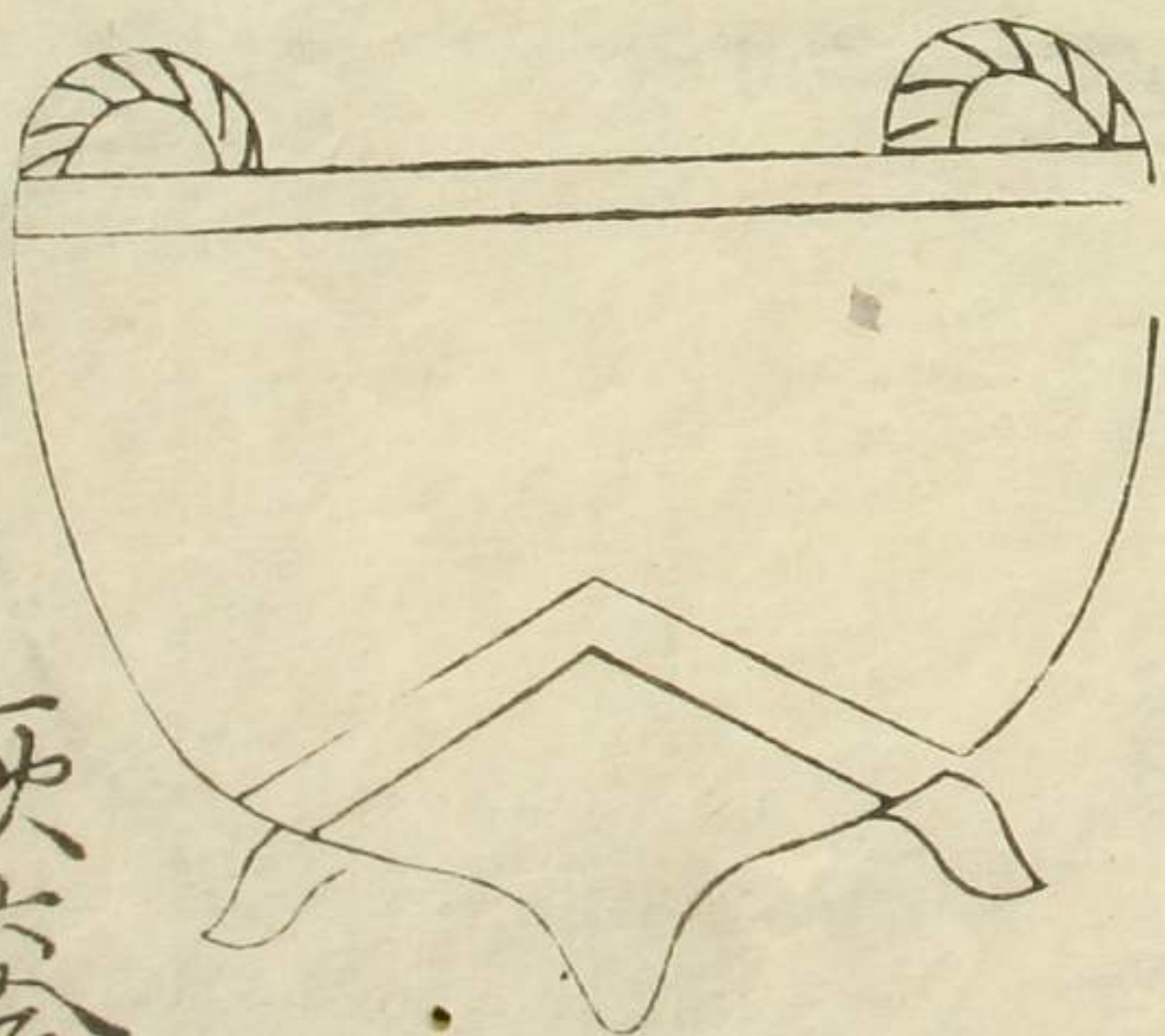
九



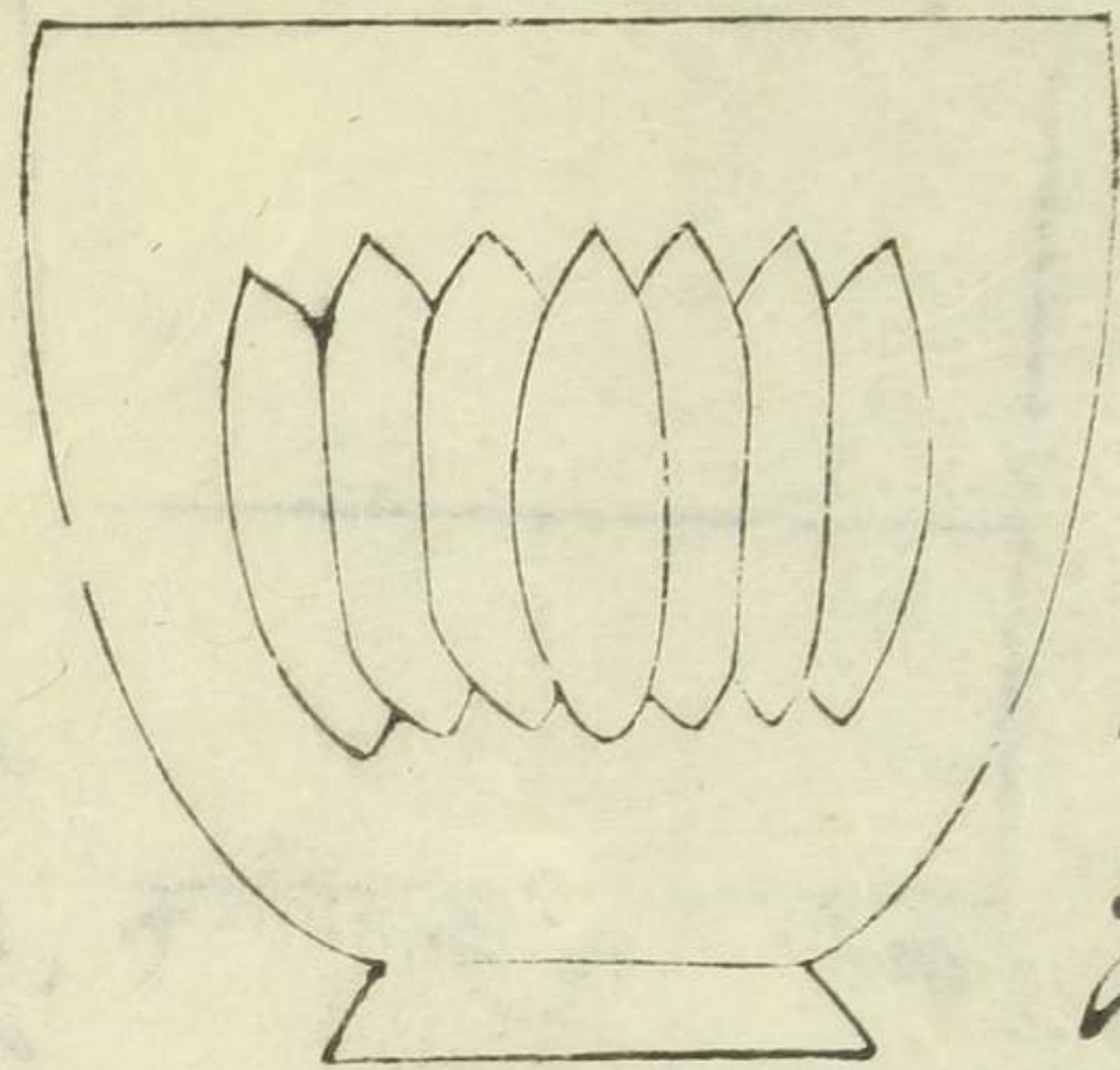
海王り香炉一灰又合

禪香爐

一灰六合



下

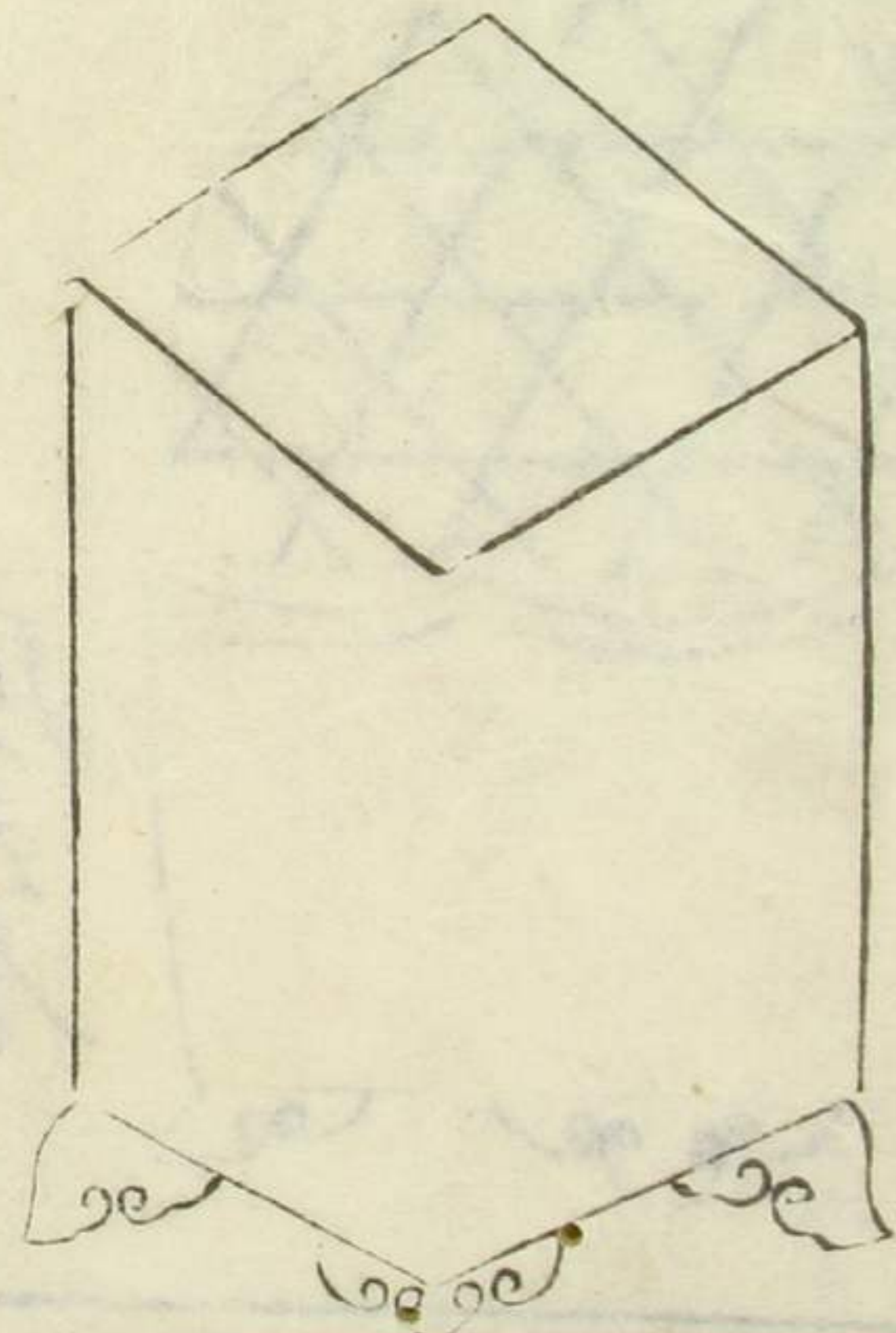


志かき

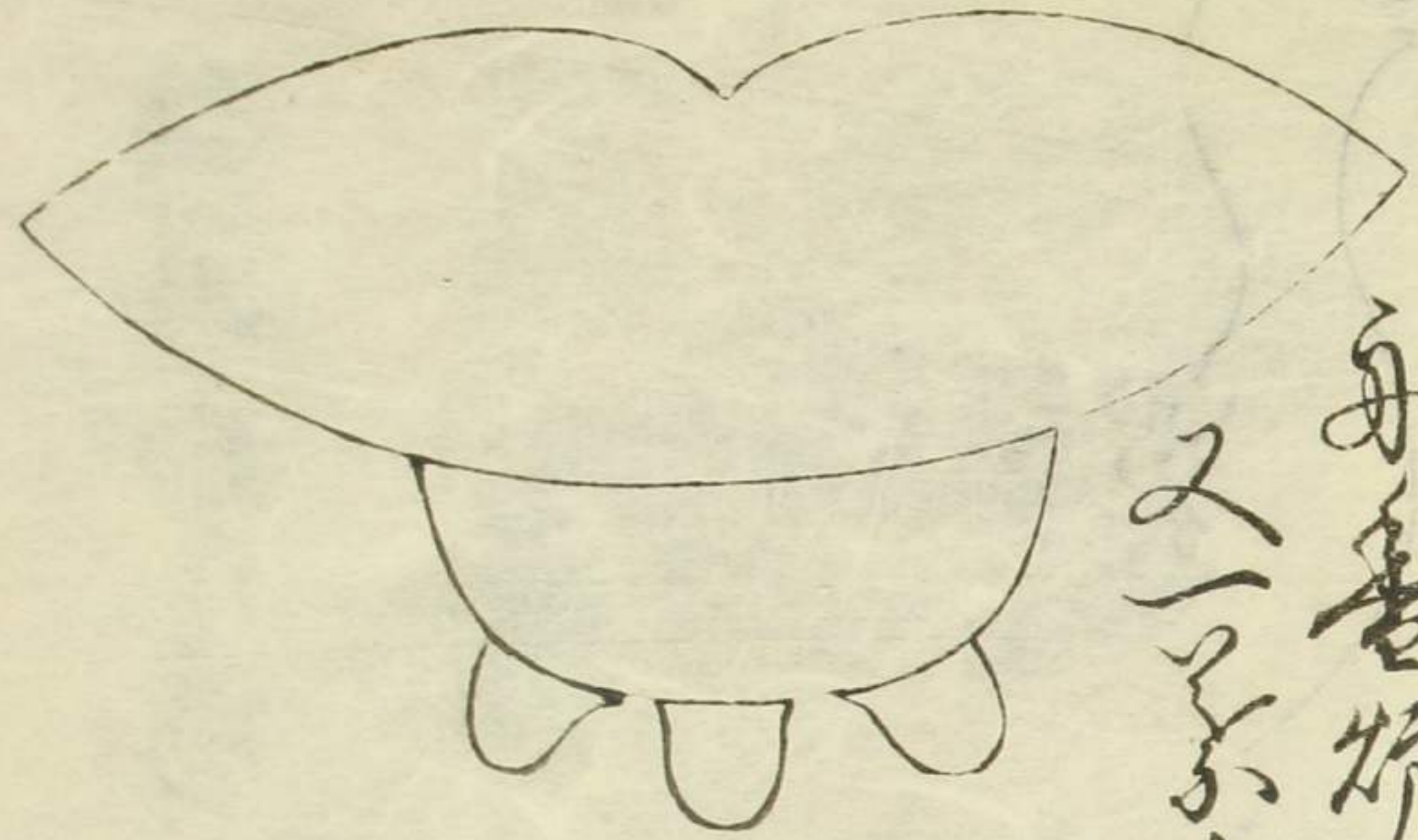
一灰又合

四方香爐

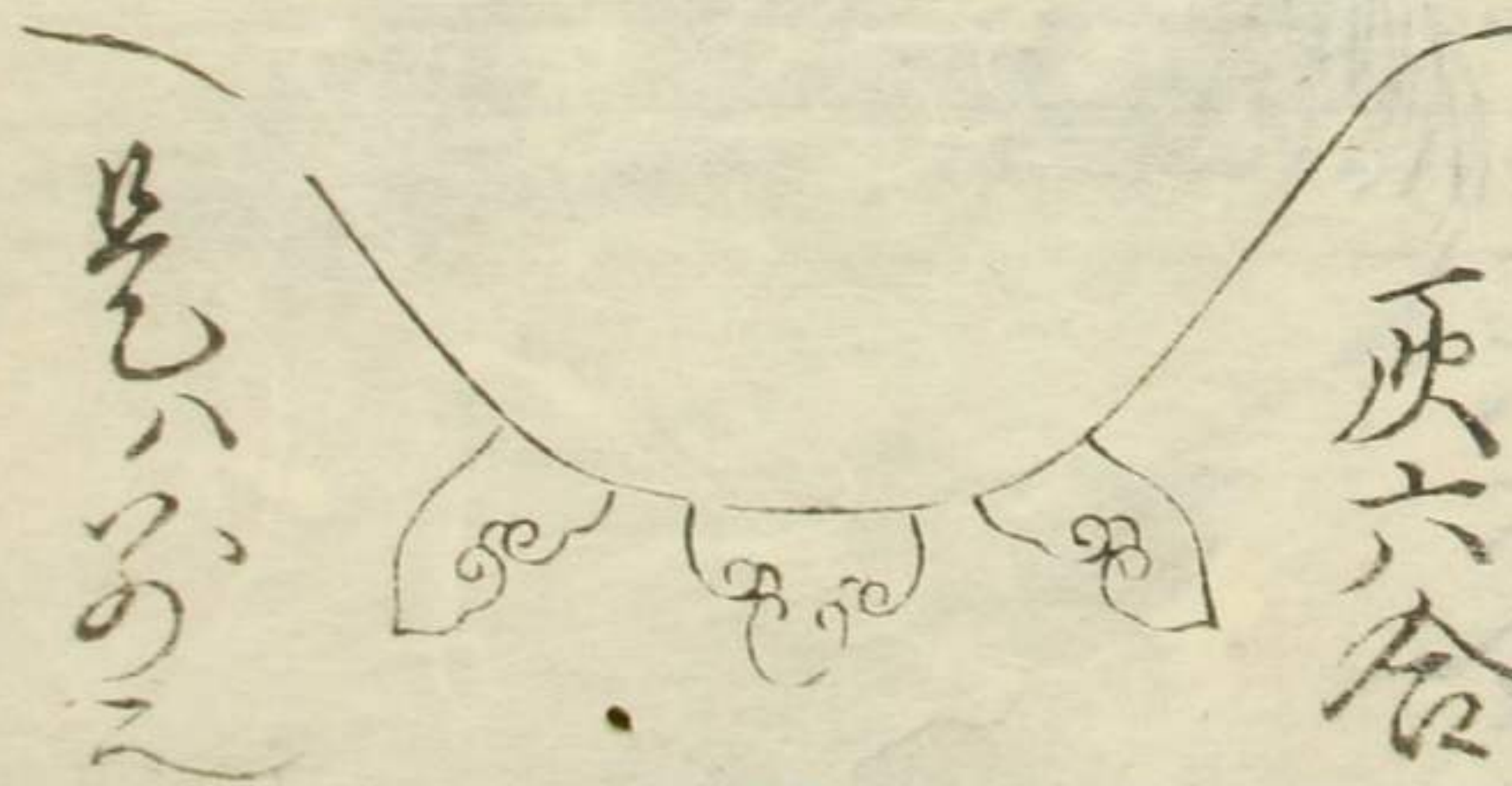
一灰八合



平

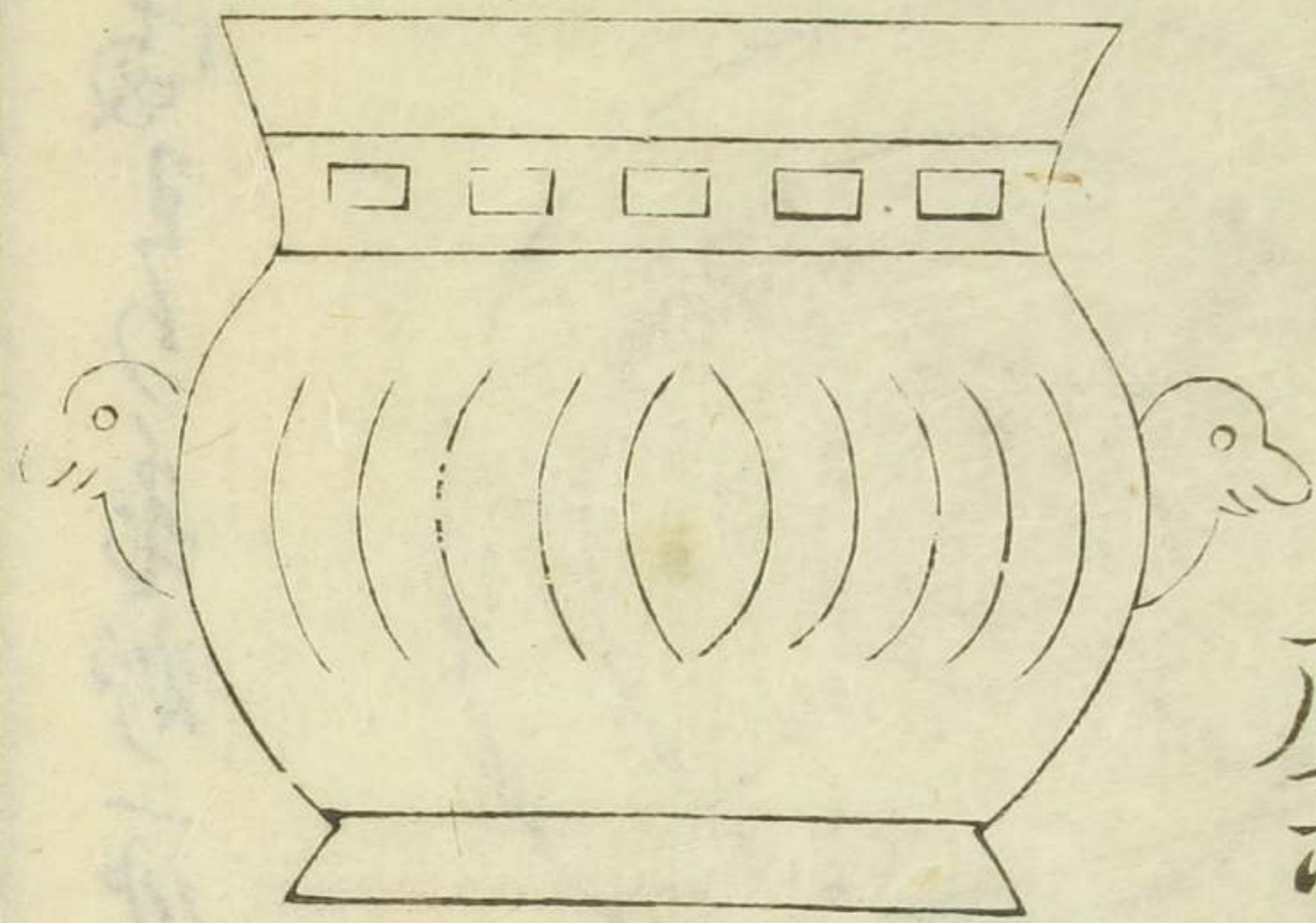


舟形
又一系丸云

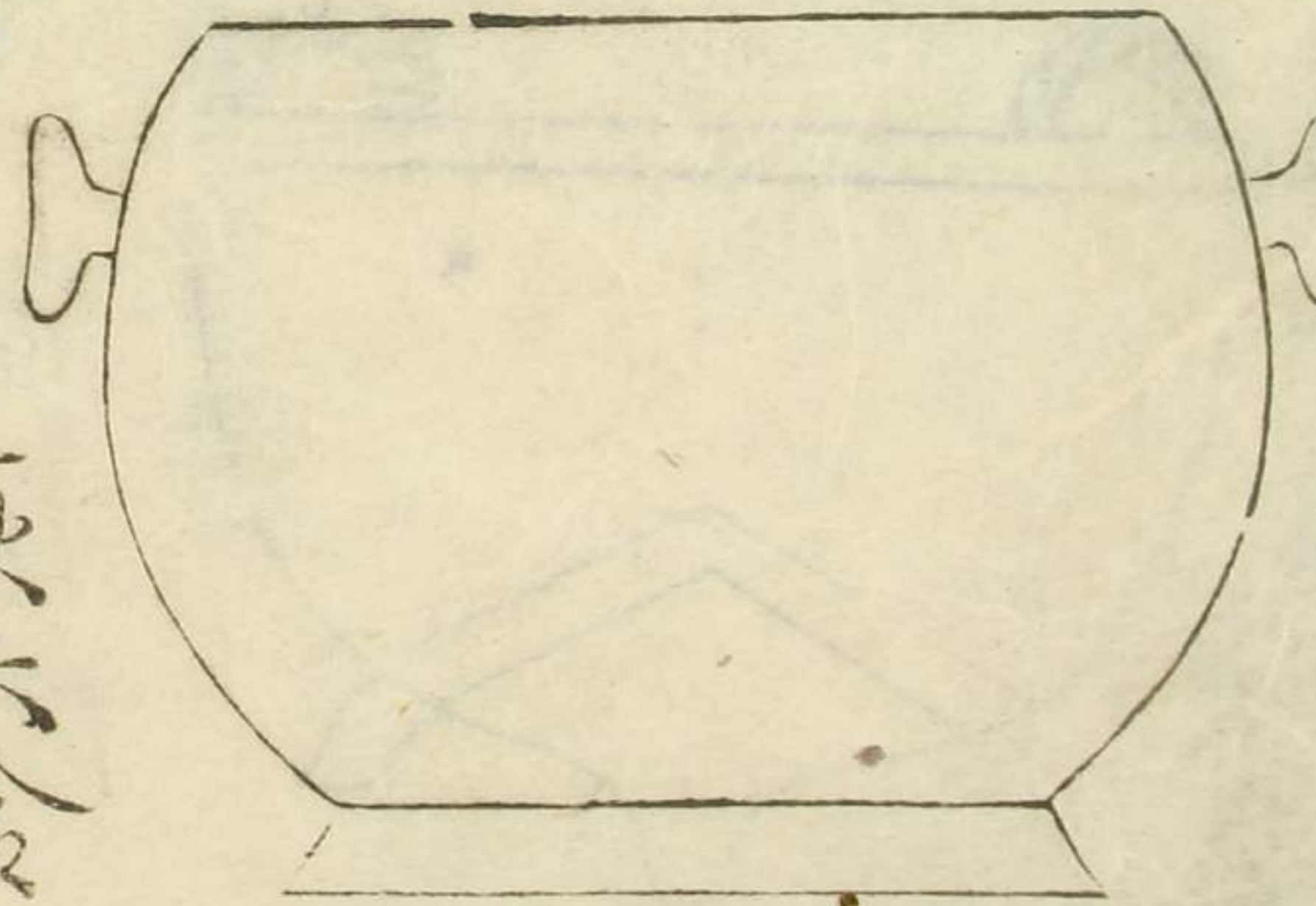


是ハハのこ

火鉢
灰六合

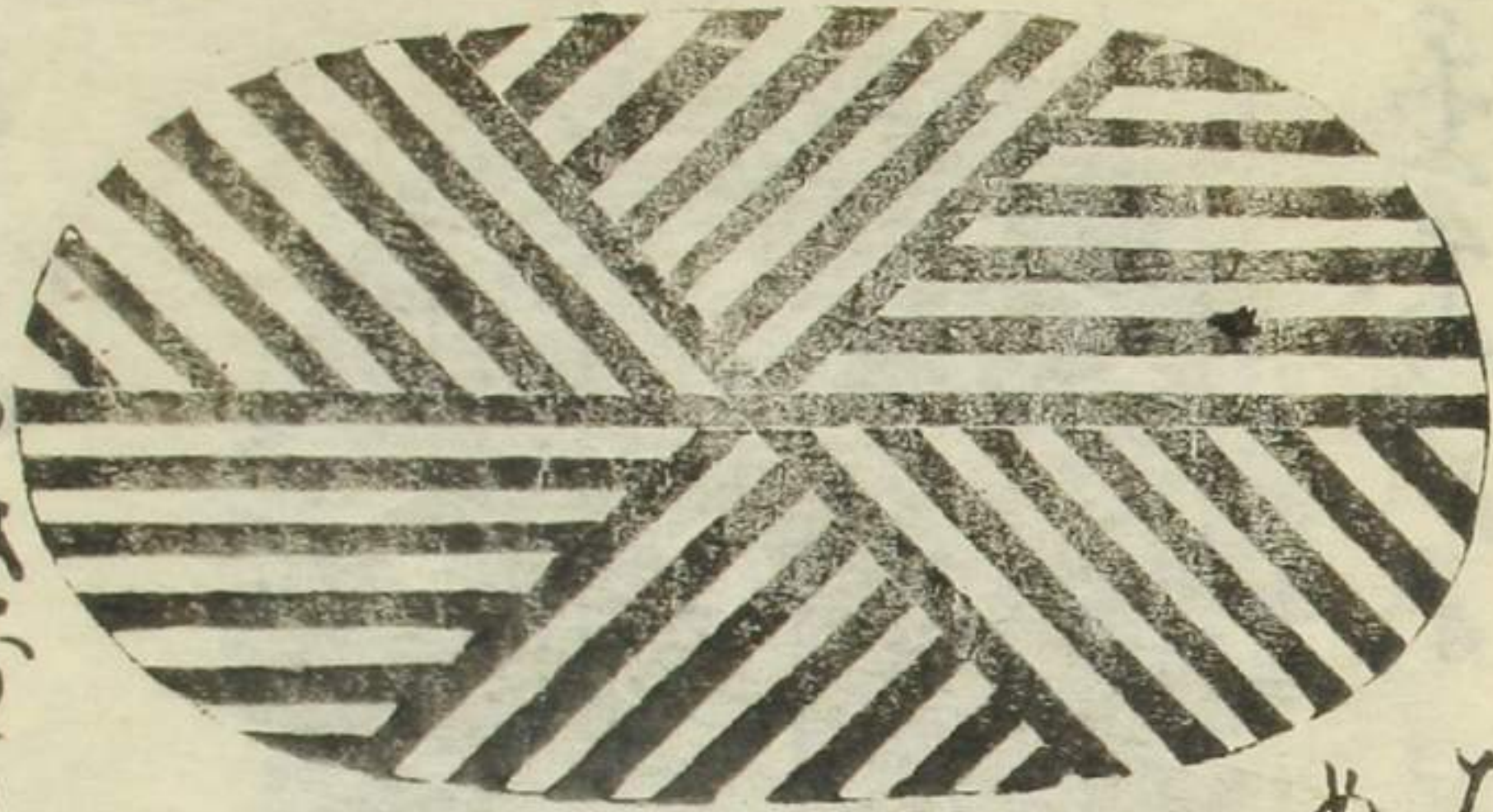


是のこわうり
灰六合



灰六合

是のこわうり
灰六合



此はあらい付物
し

鴨の尻の善好
め
しめ
め



獅乃善好

灰六合
下



鴨のおうけ

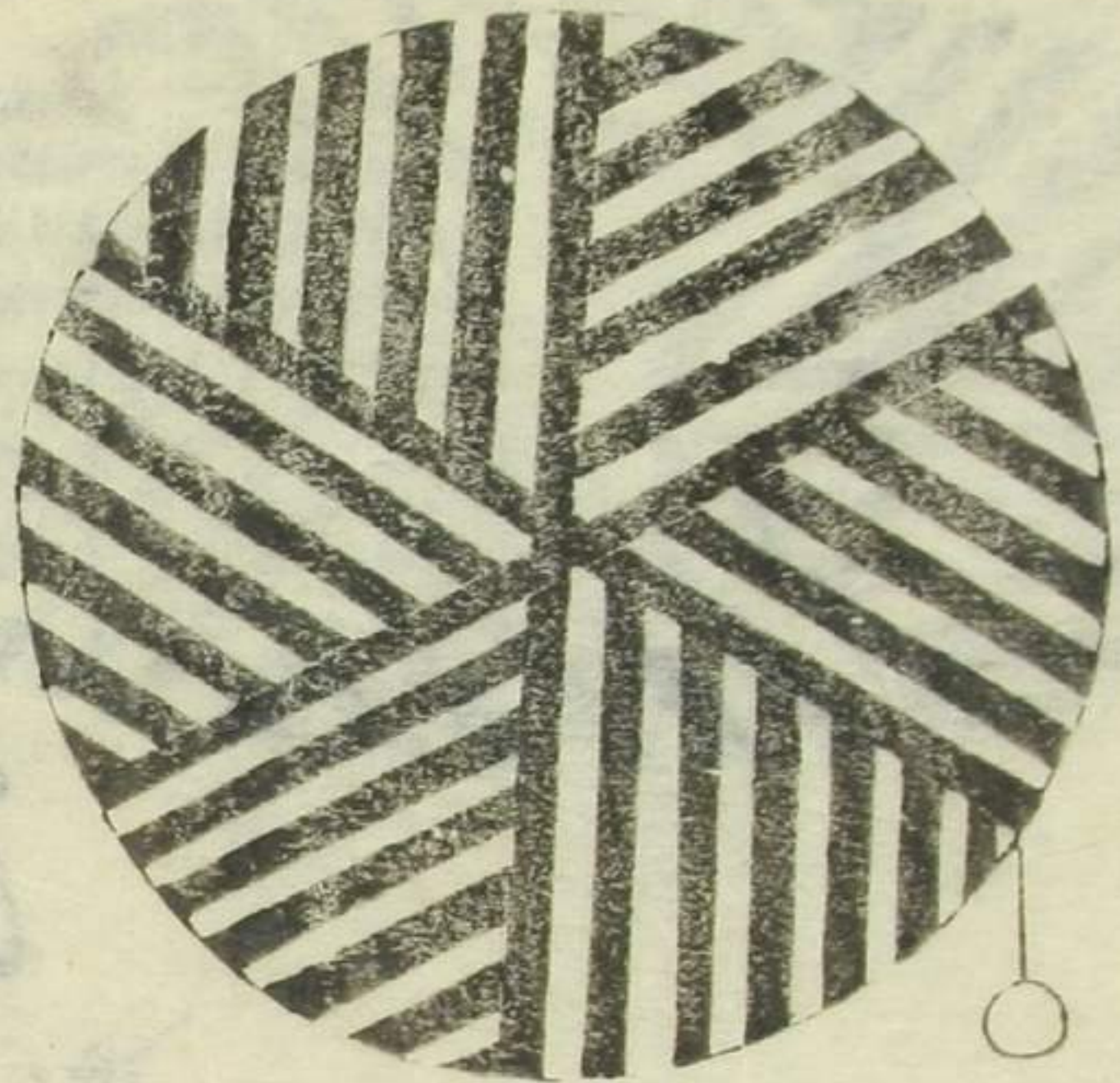
灰六合



鴨の善好

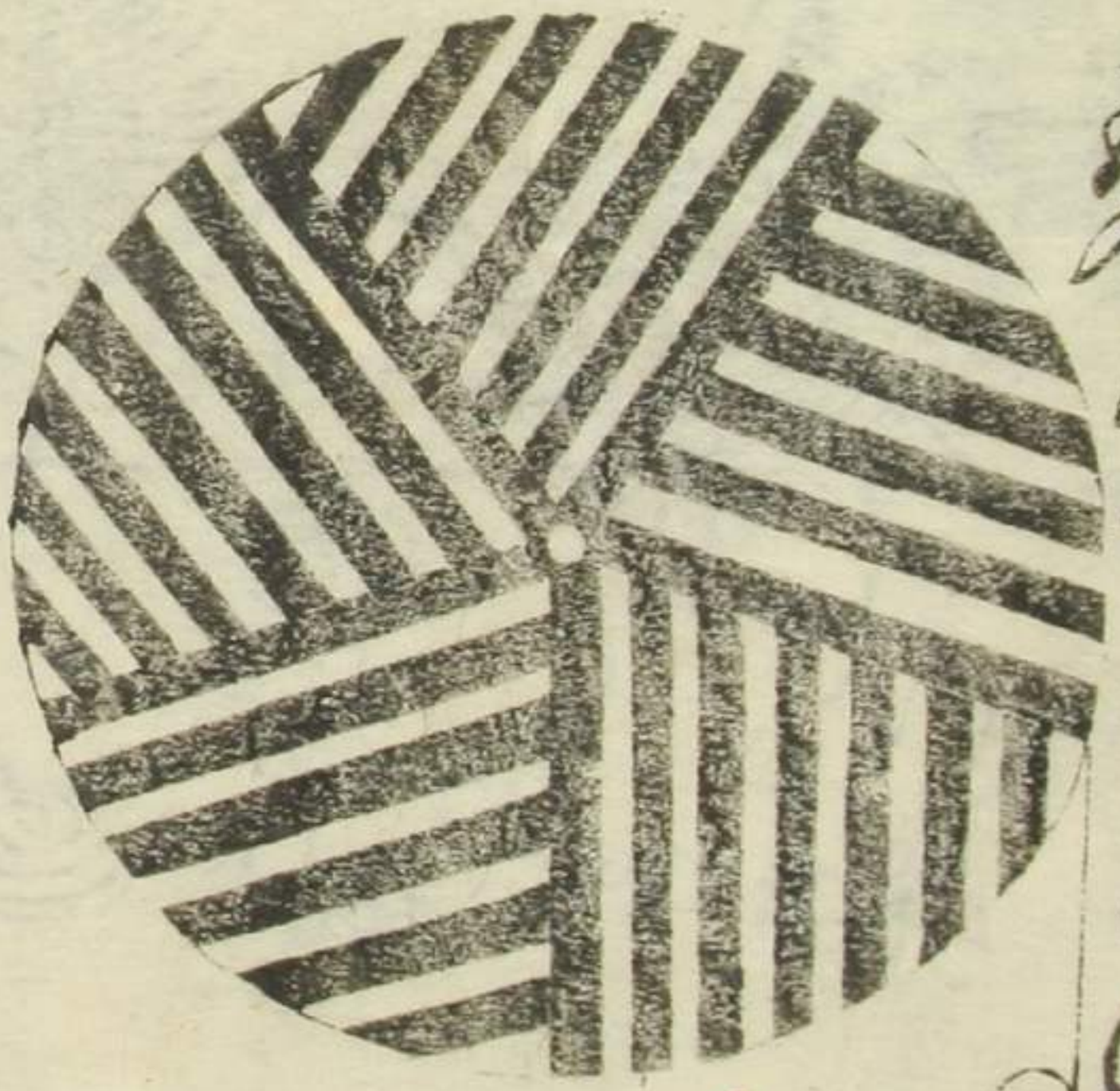
灰六合

大倉のししめかき



○玉衣のししめかき
ししめかき

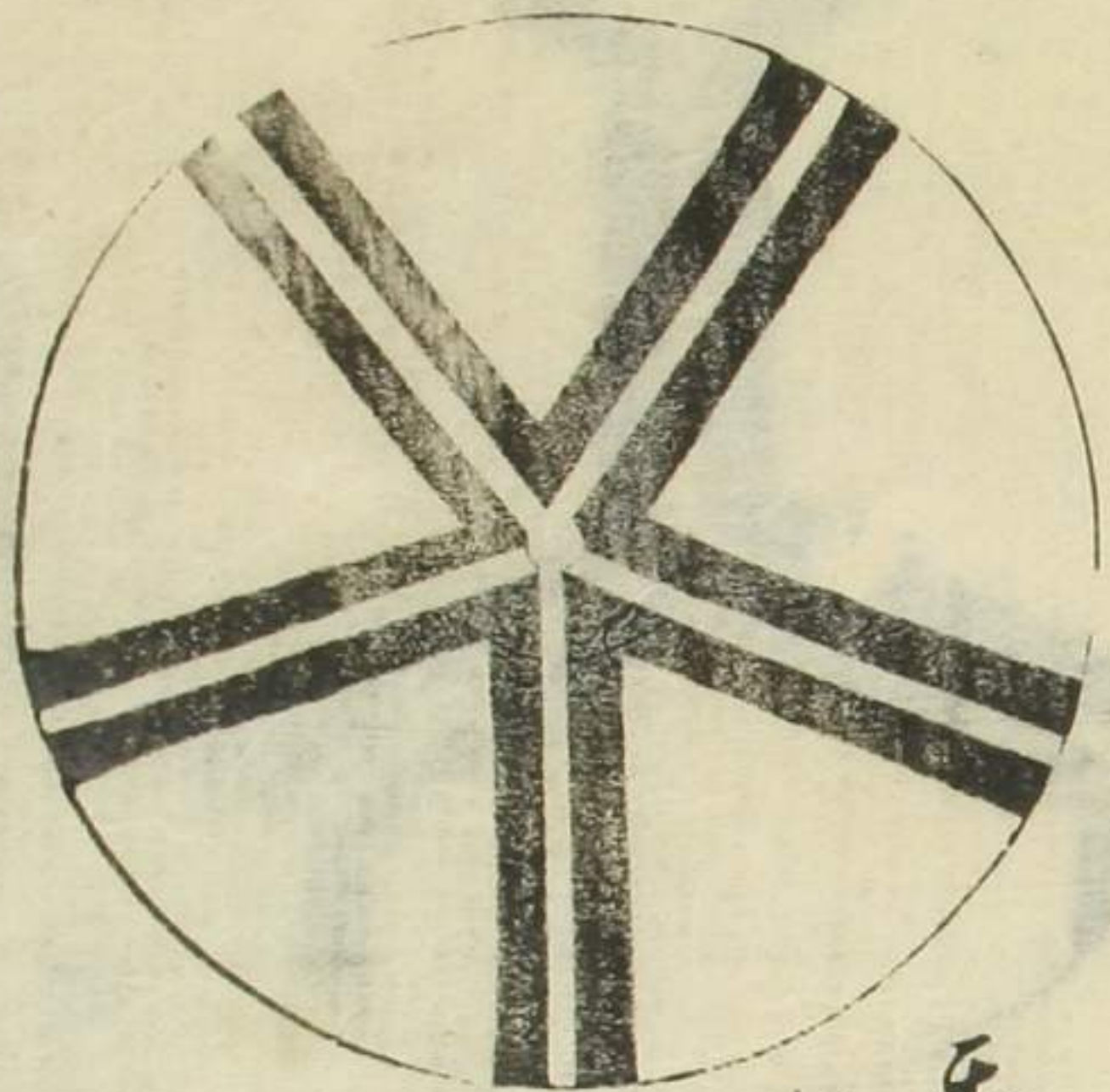
又倉のししめかき



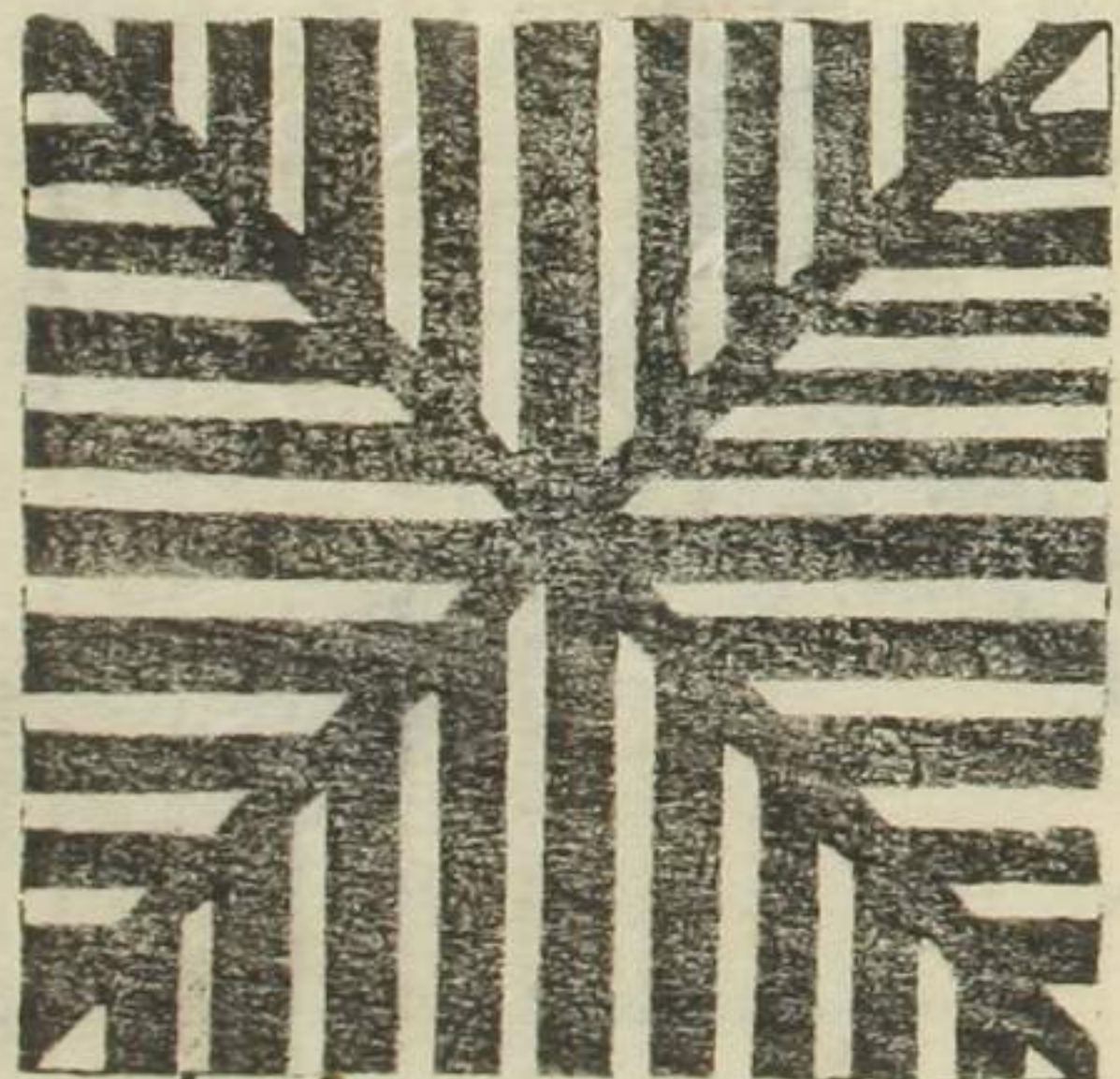
○玉衣のししめかき
ししめかき

灰そさうな

ししめかき



玉衣のししめかき
ししめかき
付始



四方のししめかき

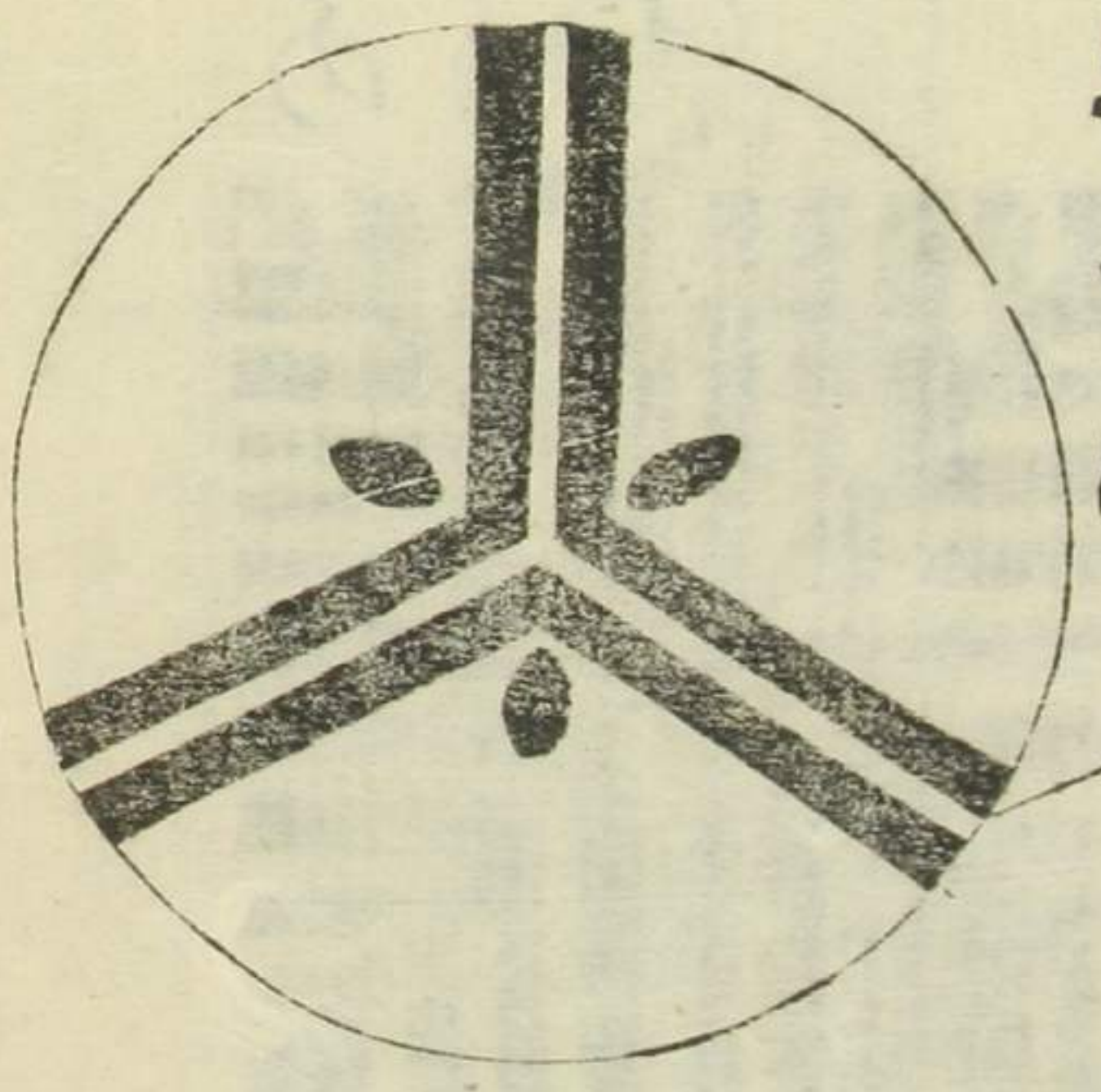
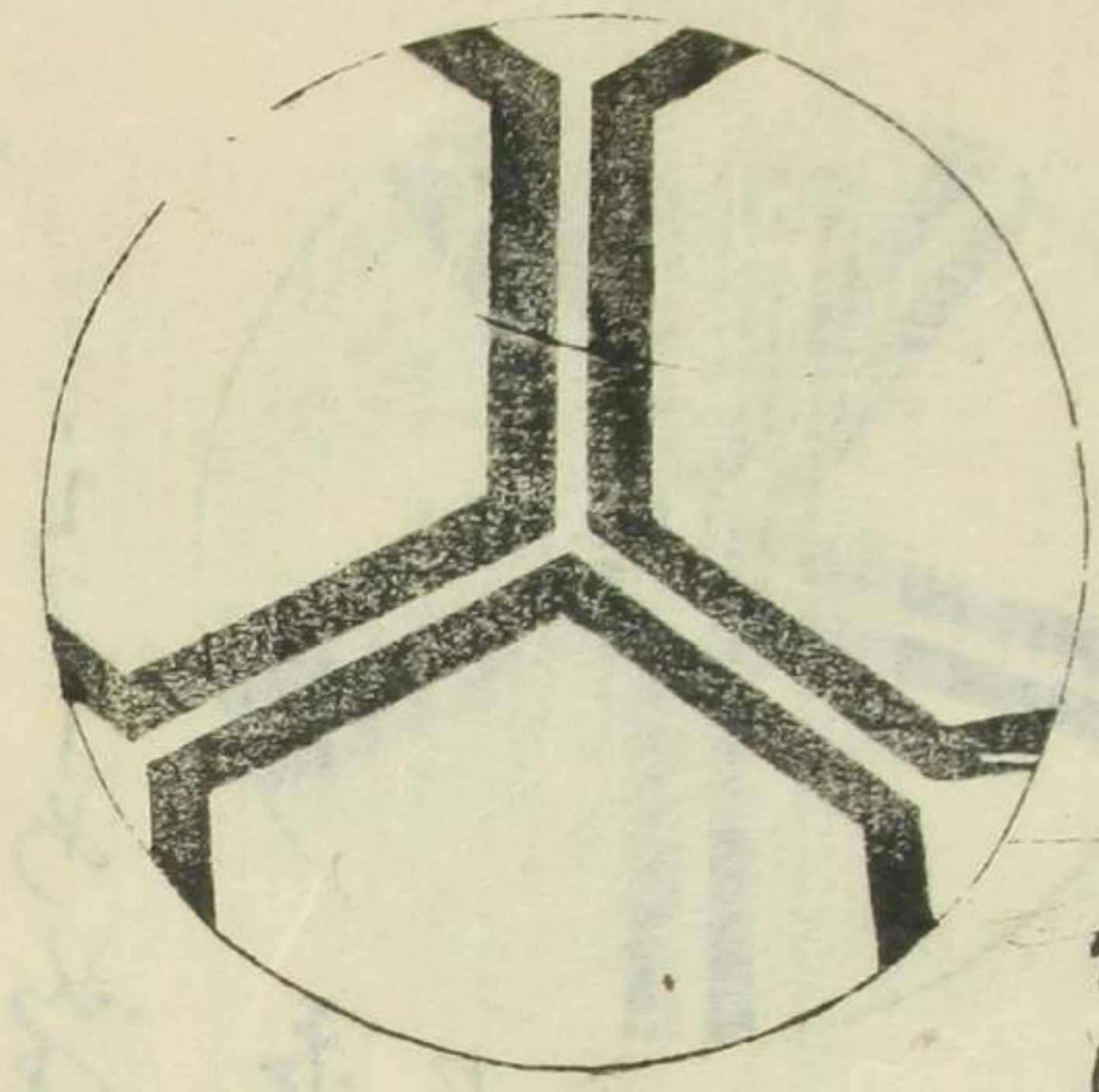
一 灰乃押指をこれそさうなるよ

玉子ののこり

付始

是より

是より



玉子ののこり

二 重香白隠

一 灰六合

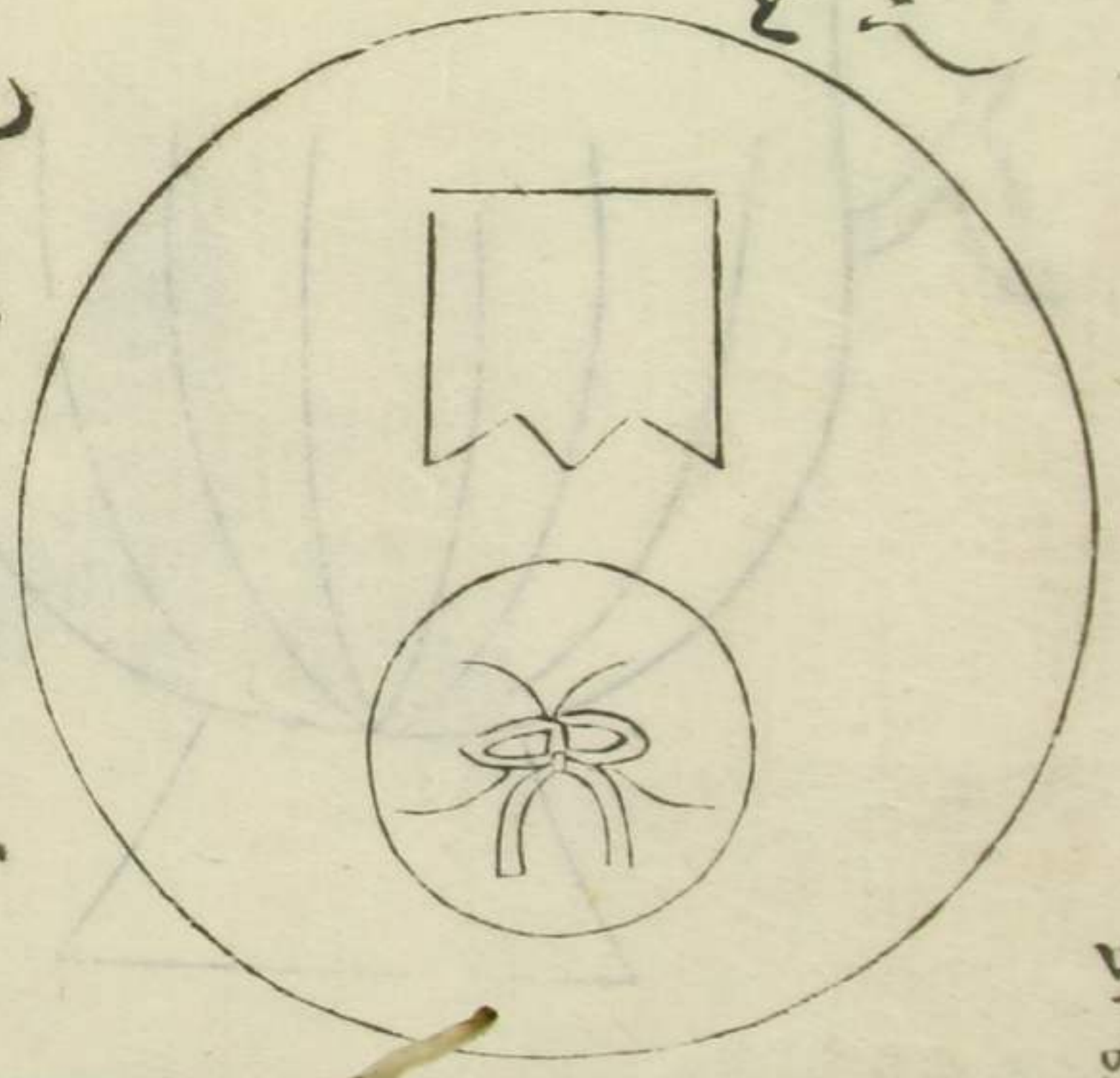


5050 5050 5050

わり地の丸鏝よハ
 花より手結の方へ向
 へふよか時ハむれむと
 向へ

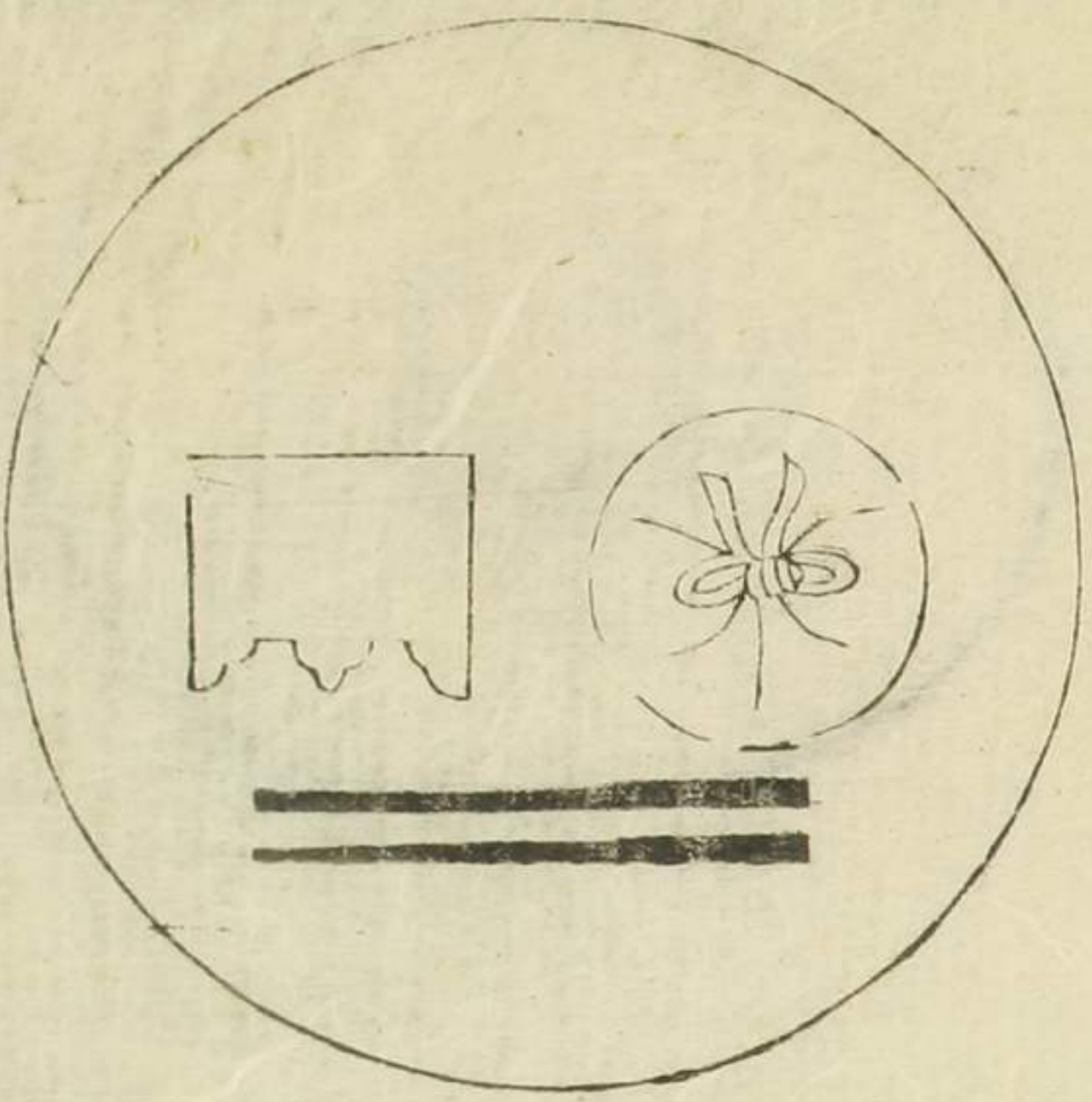


丸鏝よを時ハ
 袋の結乃あむり
 けふへ



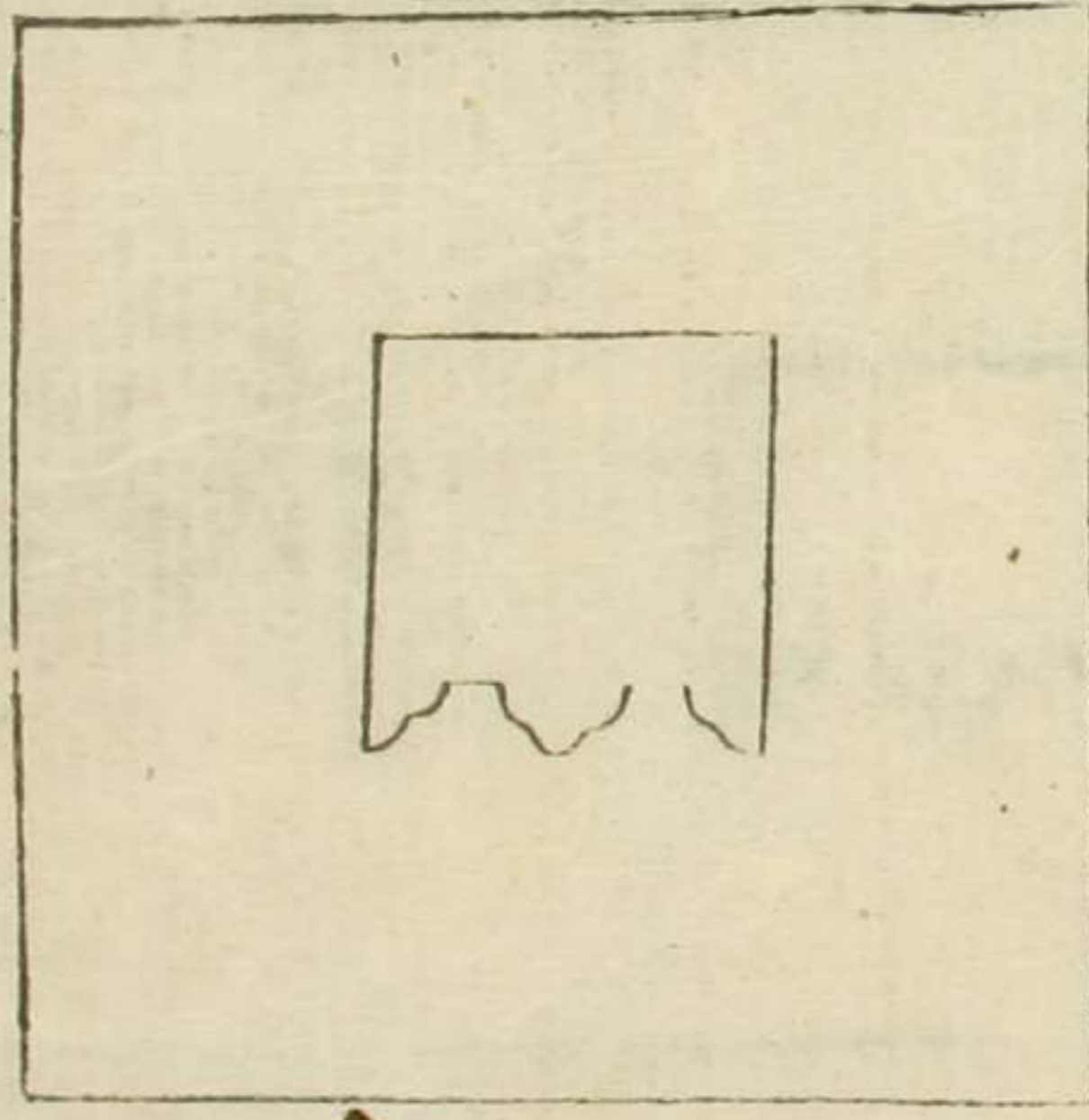
目ハ

丸鏝金合めけ



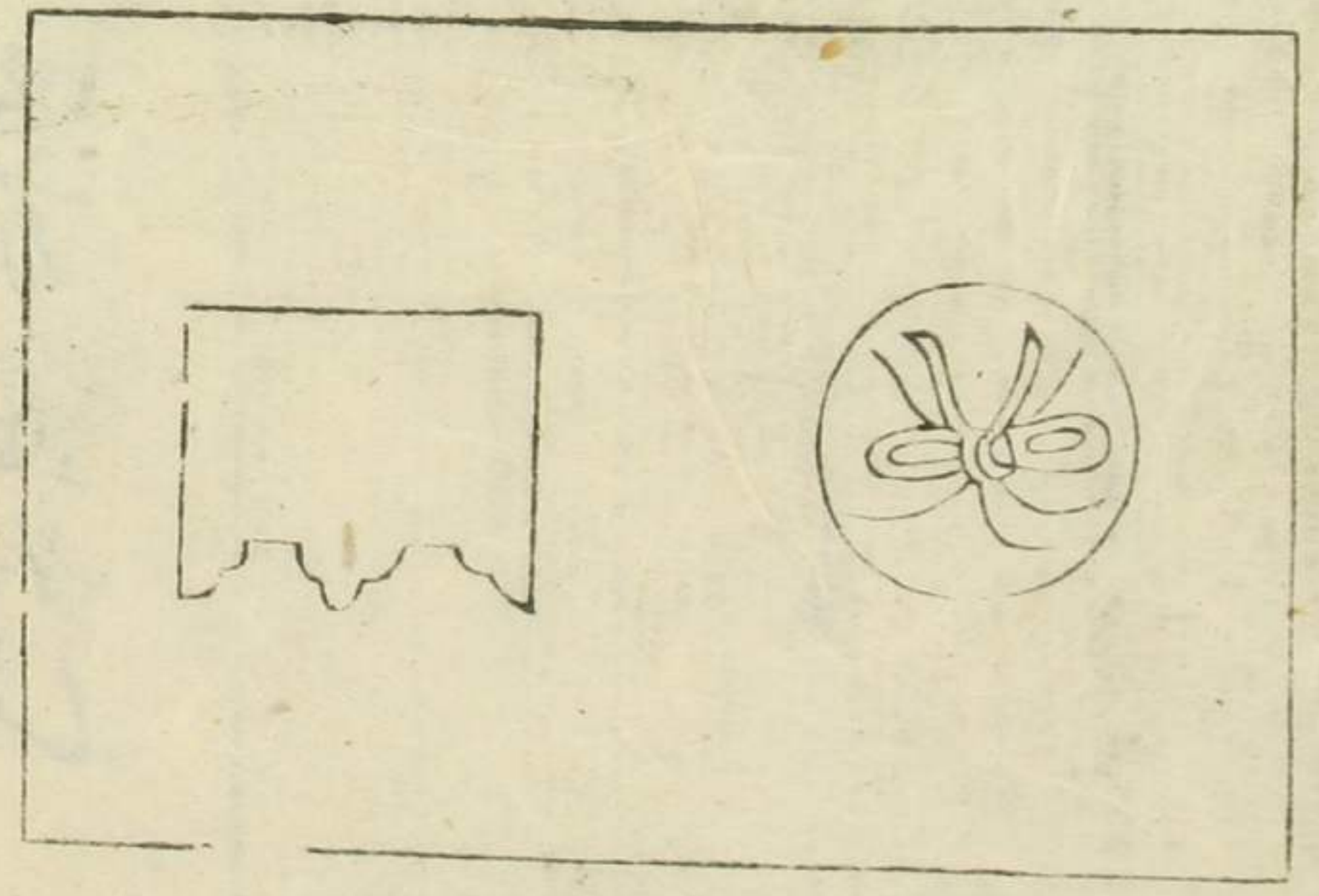
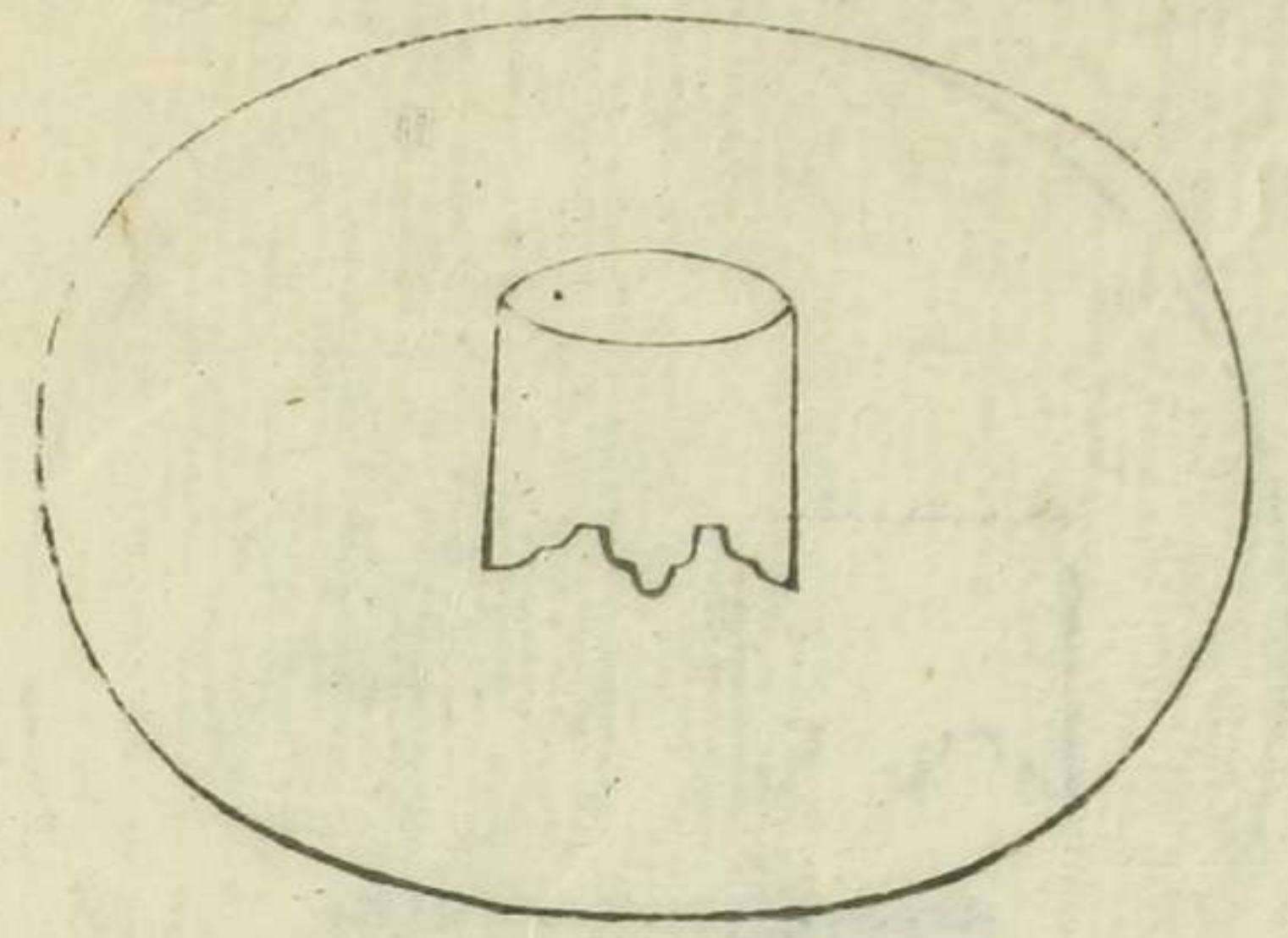
丸鏝し向

四方金めけ

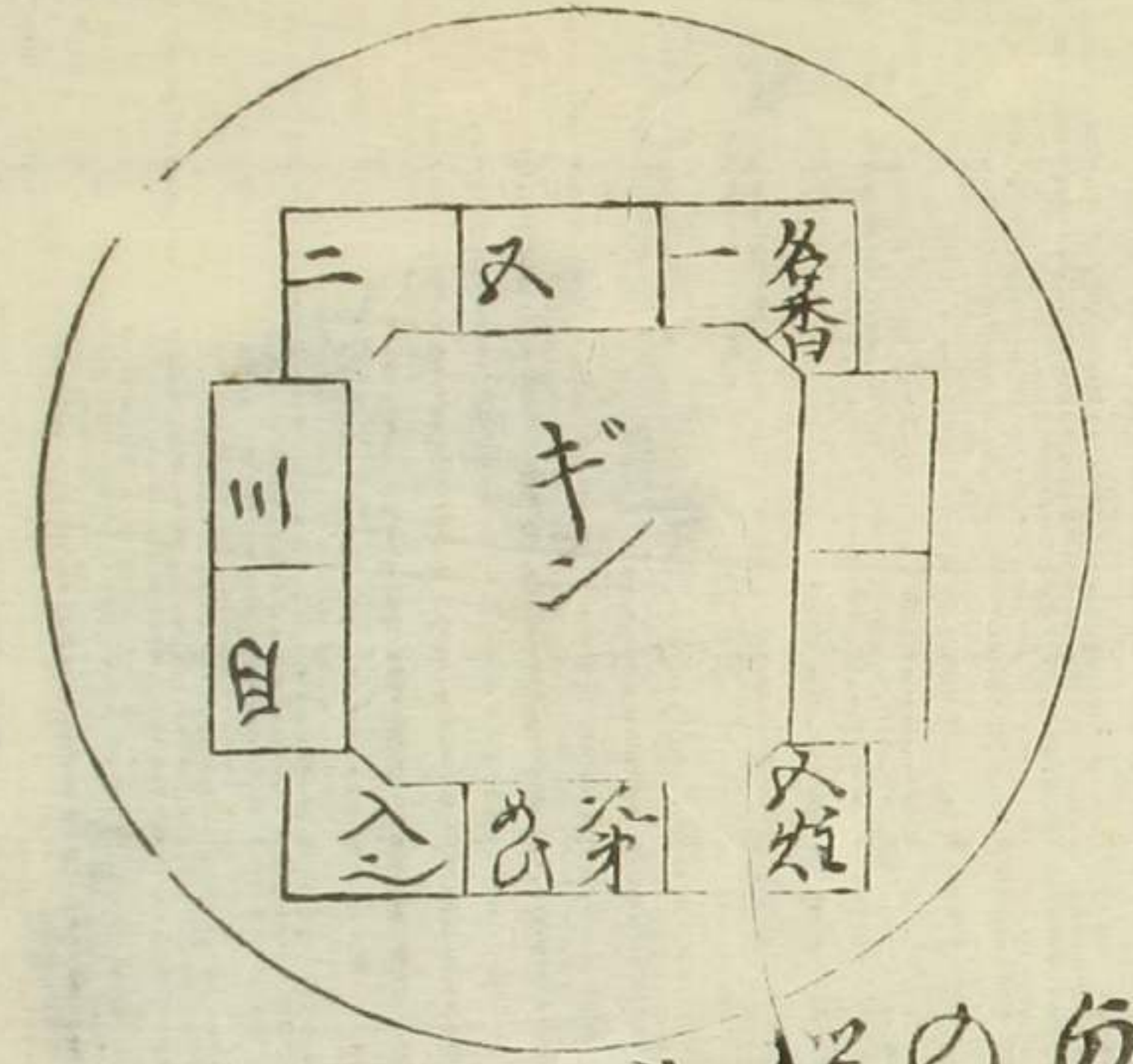


ト

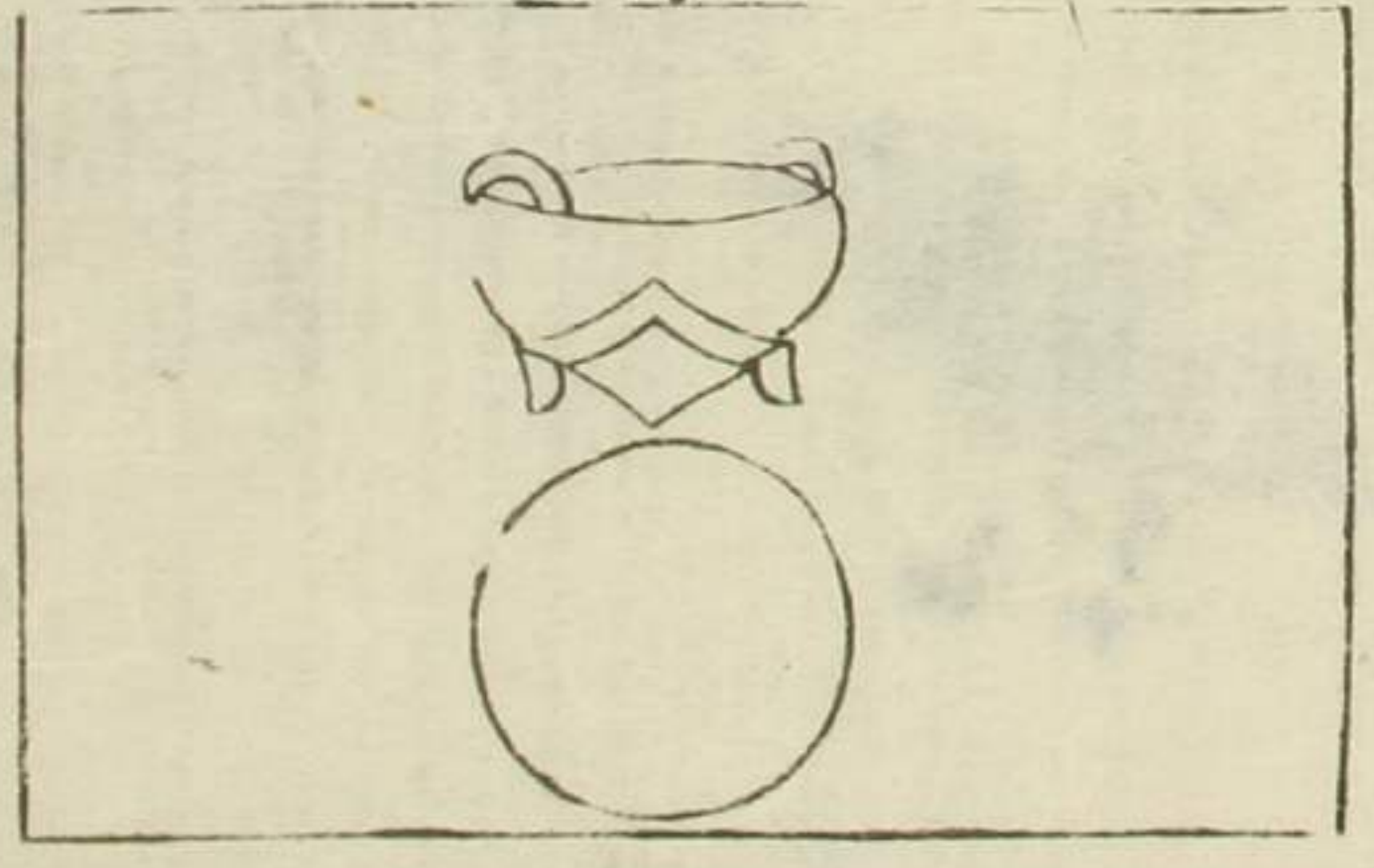
くろくこま目 七色二玉め



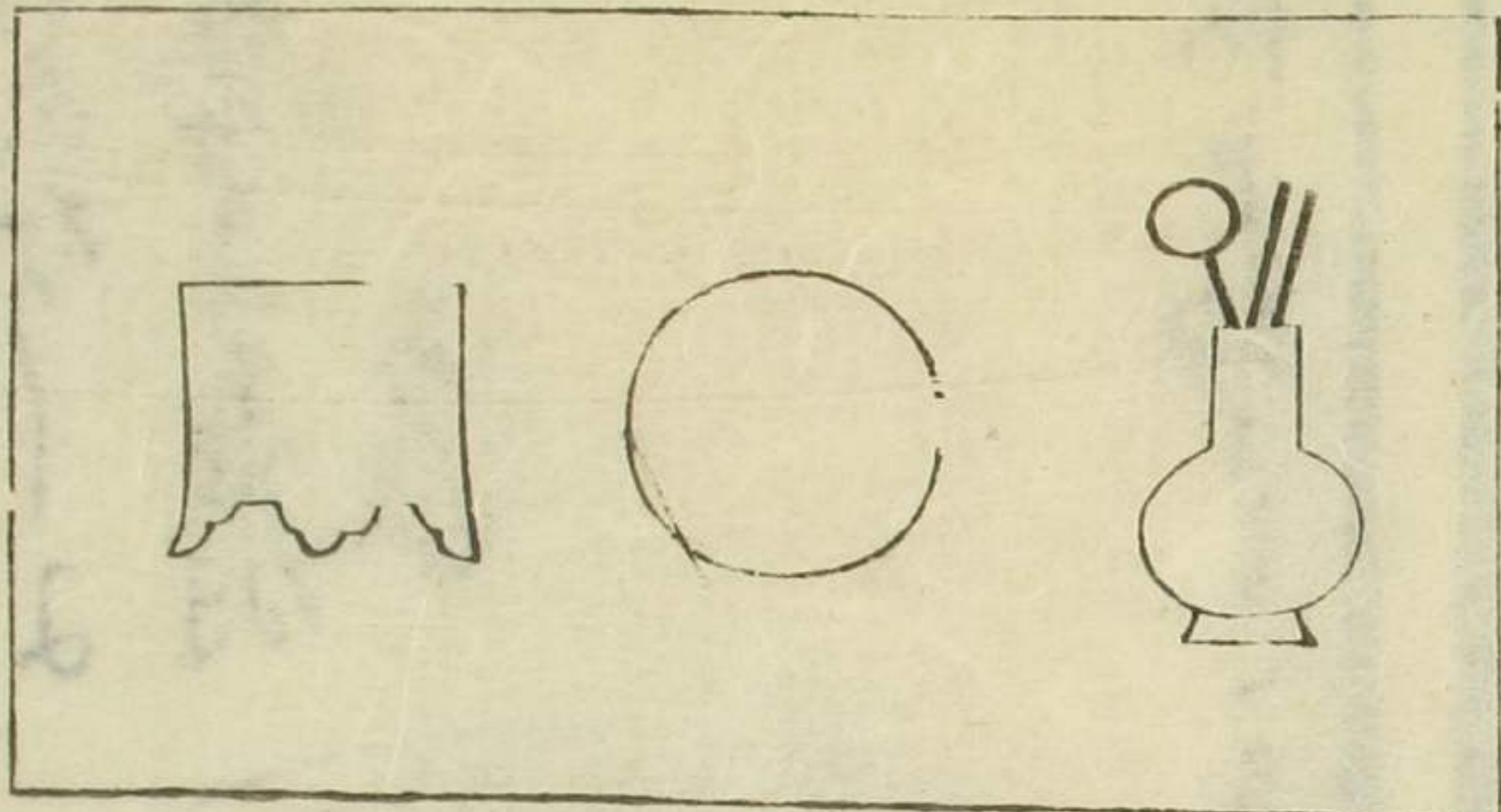
香合より名香今らくは方わかれ



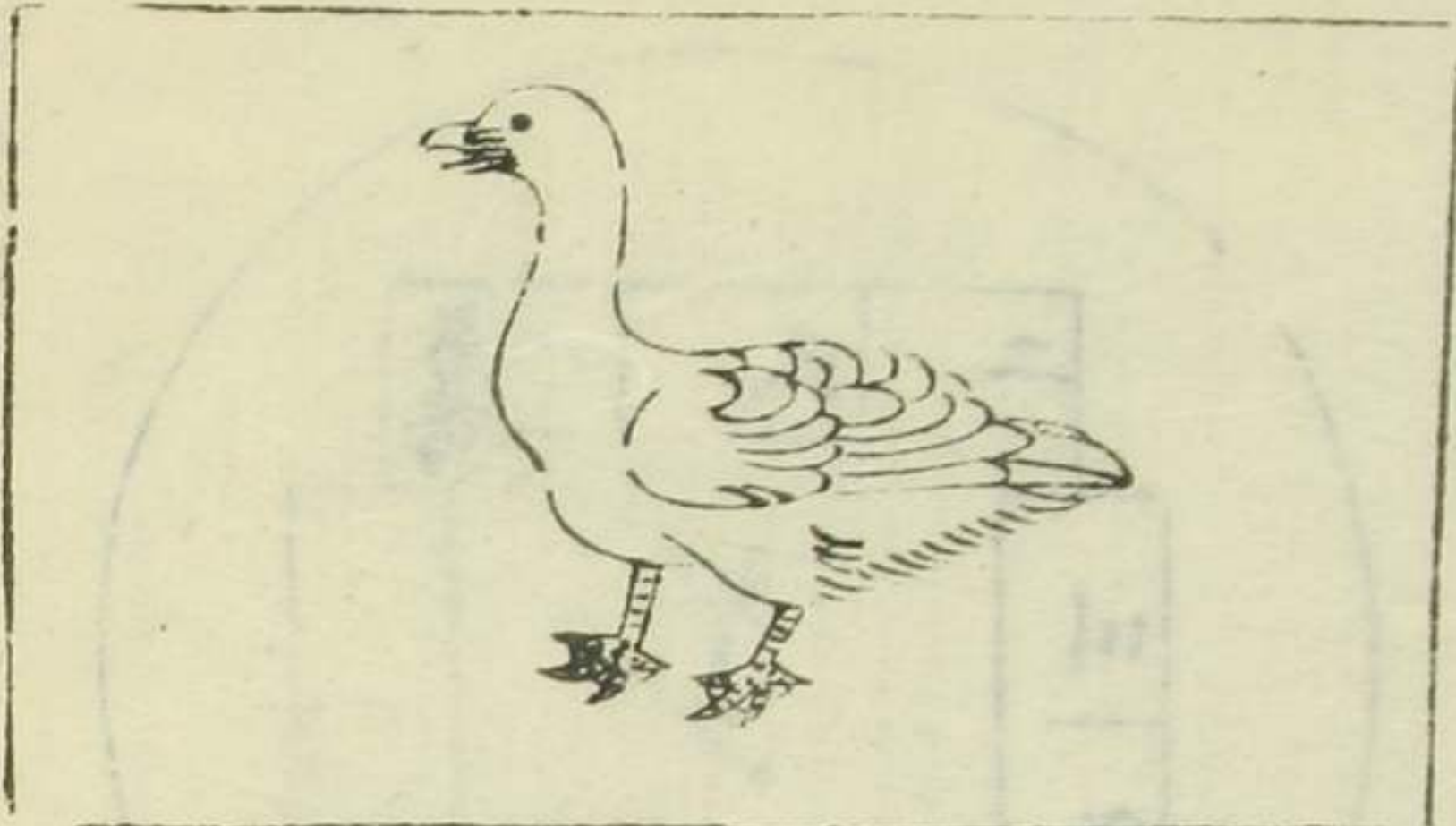
卓球座
の中ニ
様
香
合
と
丸
と



絵一幅も二幅一対
とけり



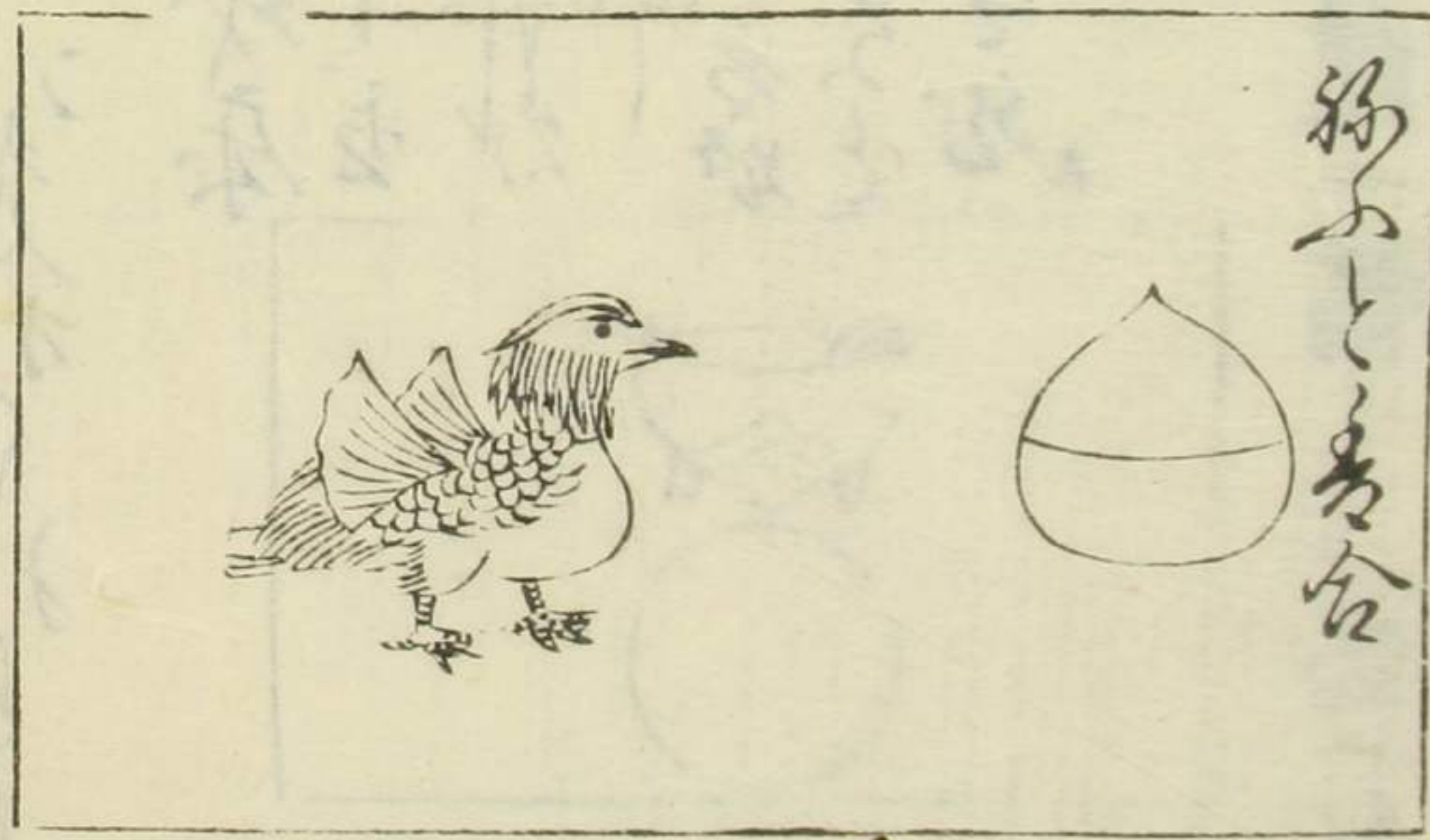
長と丸と又と音物
 之色め
 遠棚ニ
 下



鴨の肥子のかうス

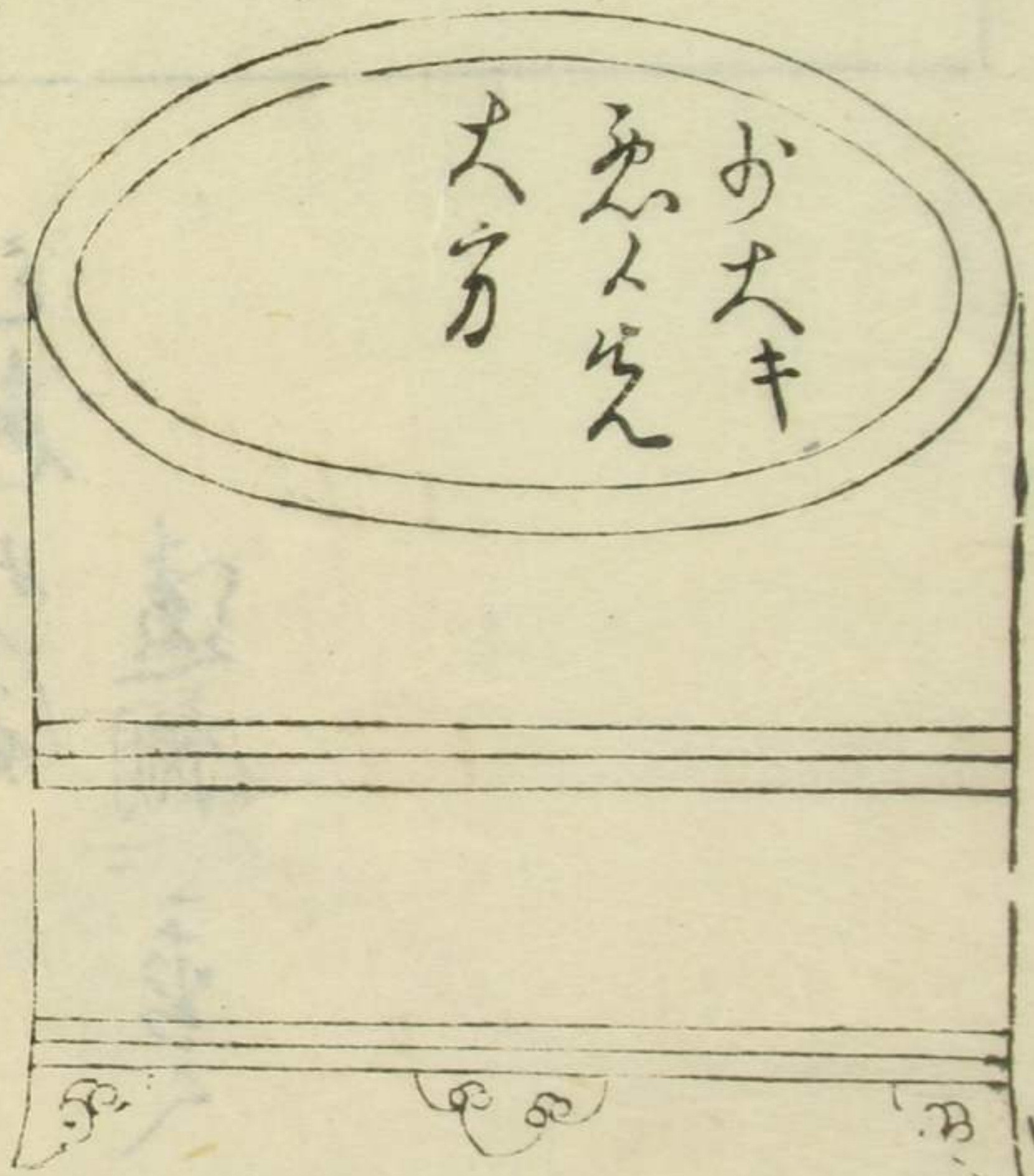
かんたんニ
 三つ

かんたんニ
 二つ
 め



物と音合

多たうしよ
 床よ玉厨
 めい

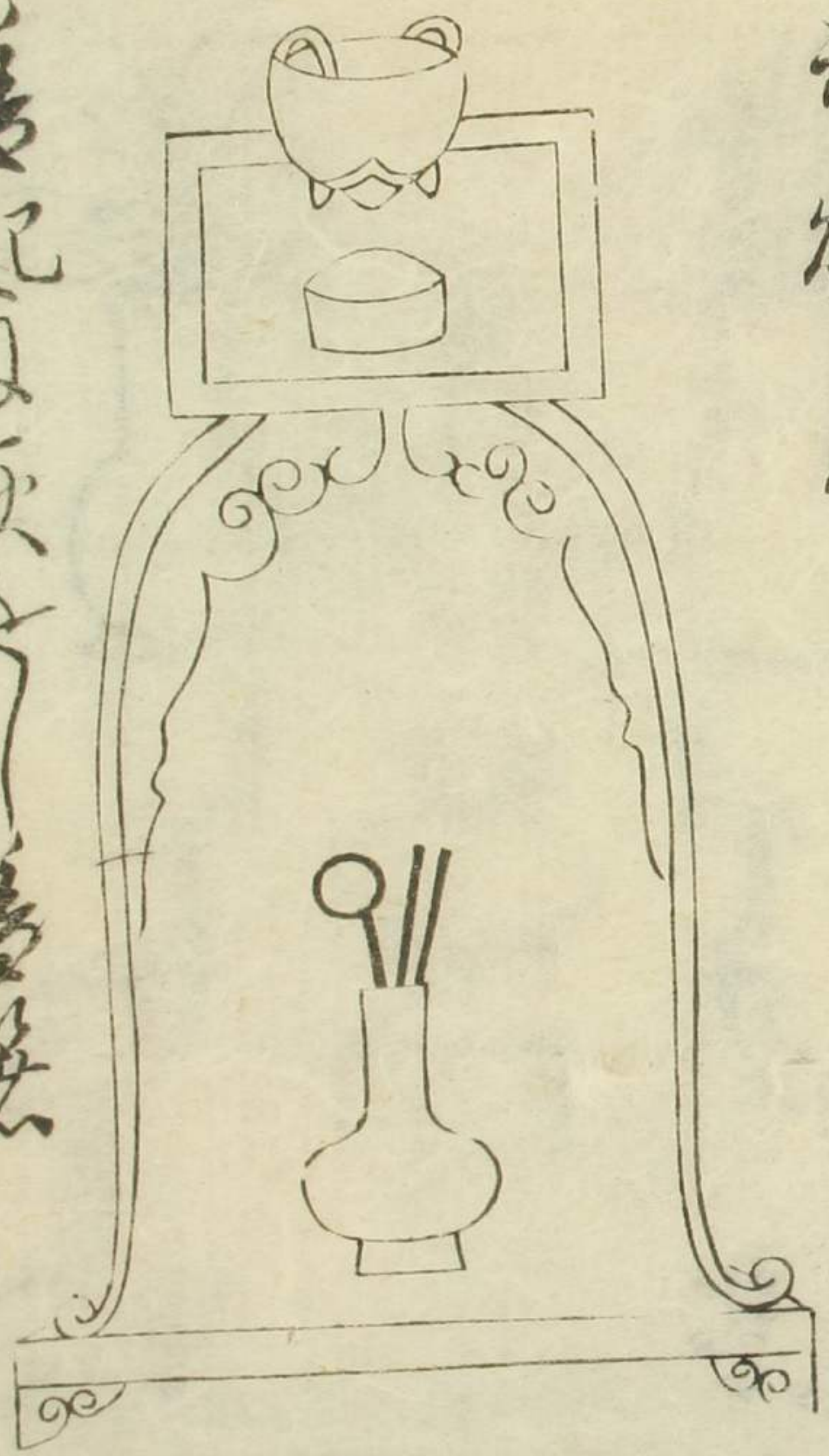


お大キ
 おん先
 大方

何と油さきこ五

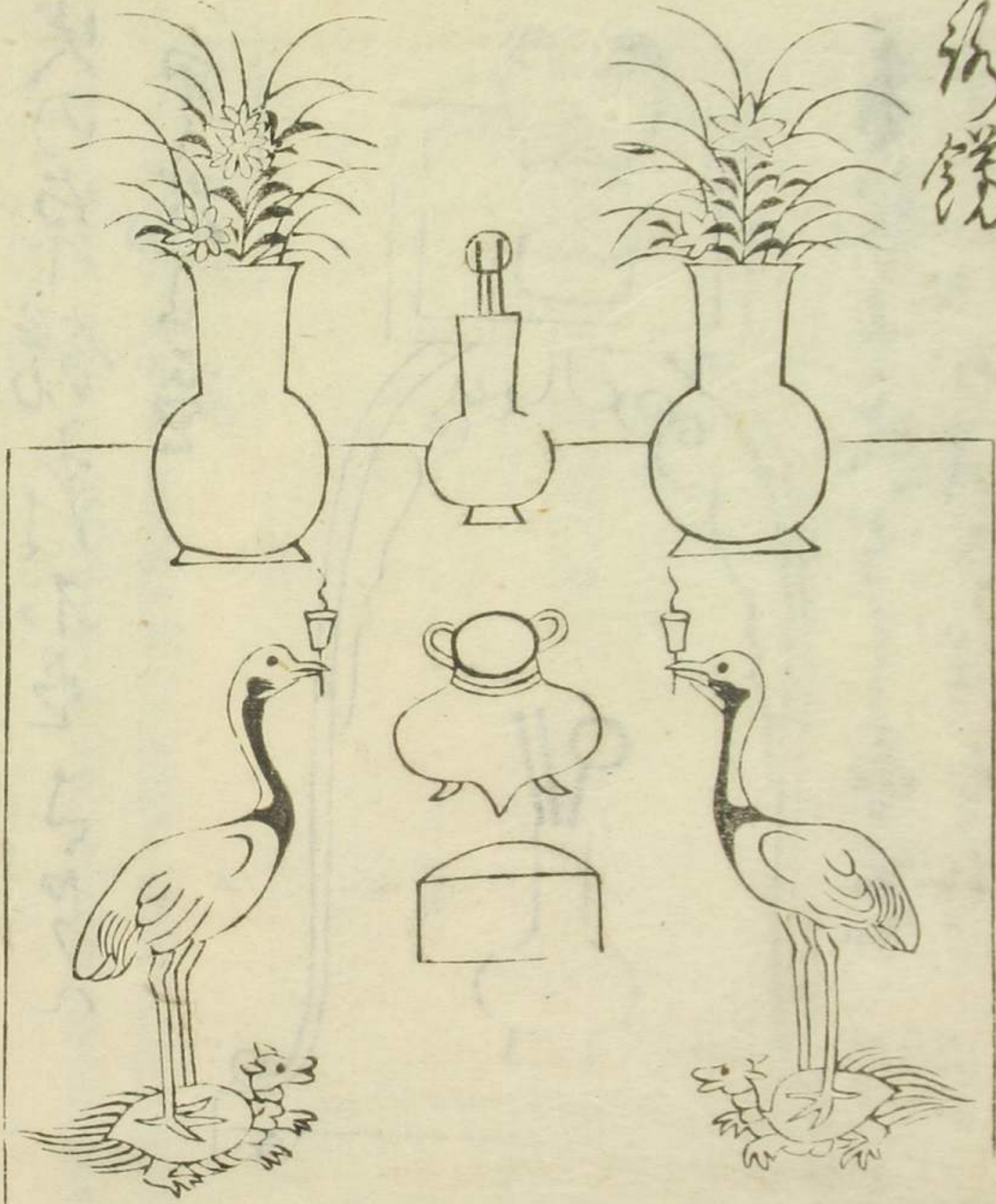
袋大手方たろて。太ろてめても何たこ

中央の卓鏡おけ不巻させん
 又、空鏡よこせ



善起よ灰さし善集
 こし指めけさすなり

の紙鏡



小包紙廣さの寸

家のとく

きくるとの寸方

二タリ
めは各取書之

木の葉
乃寸方
秋のめ
三毎うよ
もどる
りてお
なり

大包紙廣三寸方

字六分

三寸八分

方寸

夫周書之明德古性今來一國俱以仰
慕焉或却後思而來神仙或瘵沉
痾而生娛樂不可勝計故聖皇曰雲
祝六珠價直百千兩金也建邺隆勝
公嘗傳受田黃法誠役獲別書能念
聖妙而祥辨產古郡縣的分芬甘芳
淺深時人竊以假名諸之只忽別真
仍采百發百中而已

于時天正第^三乙未仲秋^右辰

洛下翠竹菴^送三^弟之

隆勝入道殿

堀川通高^上所

植村藤石衛門

隆勝

